
Exorcist ~ 悪魔と戦う者 ~

BRISINGR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Exorcist（悪魔と戦う者）

【Nコード】

N7150S

【作者名】

BRISINGR

【あらすじ】

ある日、俺・那雲勝羅の部屋で倒れていた少女。その少女・ニコは自分は“天使”だと言った。これは勝羅とニコが様々な世界を渡り歩く話。 《とある魔術の禁書目録》の世界で起こる騒乱の数々。大能力者（レベル4）の下剋上、暗部の襲撃、十字教が使う『天使の力』^{テレスマ}とは相反する力を持つ逆十字教の逆襲、堕ちた神裂。それぞれが為す思惑とは！？ 『禁書目録・始動編』を掲載中。

第1話 出会い(前書き)

初投稿2日目にして2作目の投稿！

基本はこっちメインでやるつもりで悪しからず(^^);

第1話 出会い

ここは伏獅成市。ふじなりし

この町は他の町とは比べものにならないくらい大きく人口も多い。第2の県庁とも呼ばれている。

そして、この町に住んでいる俺、なぐもかつら那雲勝羅は市立伏獅成中央高校に通う高校2年生。

今は幼なじみの月島奈緒つきしまなおと帰宅途中である。

「今日も1日終わったー」

「カツちゃんは寝てばっかじゃん。今日だけで何回注意されたのよ?」

「ええと……………10回?」

「ざーんねん。正解は11回でした」

「そうだったか?」

「そうよ。注意されすぎ」

俺は大きく欠伸をしながら帰路を歩く。今日は特別なことは何もなく、昨日と変わらない日々を繰り返している。

帰ってもPSP02iをやったり読書でラノベを読み漁るくらいだろっ。

そんなことを考えていたら、隣を歩いていた奈緒が俺の顔を覗き込んできた。

「ところで、このあと暇？」

「ん？まあ、暇だけど……また作った菓子の毒味か？」

「ど、毒味じゃないって。毎回言ってるでしょ。試食よ、試食」

「そんなこと言って、毎回失敗ばかりの菓子を喰わせるじゃないか」

「練習が足りないだけよ。たくさん練習すればもっと旨くなるもん」

「だったら、練習してくれ」

ま、奈緒が作ったお菓子は全部食べてんだけどな。………だって、残すと目を涙で潤ませてこっちを見てくるんだぜ？これに耐えられないはずがないだろ？小さい頃に、そういうことがわからなくて「マズい、最悪」と言って、一つしか食べなかったときは大泣きされたこともある。あれはマジで焦った。何で泣いてるのかわからないだもん。

「あとで、そっちに行くからね。私のお菓子を食べてビックリ仰天させてやるんだから」

「ビックリ仰天はいいが昇天しないくらいに留めてくれよ」

「……ふーんだ」

こんな感じで会話が終わる頃には、勝羅と奈緒は「「ただいまー」」

と家のドアを開けた。俗に言う幼なじみの家は隣同士というやつである。

side 天界

この世界に住んでいるのは背中に純白の翼を持った天使だけ。

この世界には3つの大きな自然で成り立っている。世界の隅々まで這っていると思われる薄暗い黒い雲『アンダークラウド地雲』。『地雲』に刺さるように立っている大小様々でコマの形をした台地。台地同士を繋げるために石橋がいくつも架けてある。そして、空には『地雲』とは真逆で夜明けの陽射しが照らされているように淡く光る雲『ブランククラウド天雲』。

この世界について簡単に説明したところで、ここで自己紹介。

私の名前はニコ。本当はもっと長いんだけど、面倒なので省略。

「また失敗したやつだな……………」

今は天界学院の中等部からの帰宅途中で、石橋を渡りながら私はため息をついていた。

「このままだと『魔法』で落第だよ……………」

私が通う天界学院の『時間割り(カリキュラム)』は、大きく3つ『学問』と『体術』と『魔法』に分類できて、それぞれで単位を取らなきゃいけないんだけど。

私は『魔法』ができない。

苦手とかそういう問題じゃなく不可能。

『魔法』は背中両翼を使う。まず、右翼で魔力を生成して、左翼で生成した魔力を元に術式を構成する。

でも、私には『あの事件』のせいで、その左翼がない。

右翼で魔力を生成しても、左翼がないために行き場を失った魔力が暴走する。

だから『魔法』を使えない私は単位取得がかなり危うい。まあ『学問』と『体術』は余裕で取れてる。2つとも中等部1位だし……『魔法』は最下位だけど。

「うん？」

ふと私の視界の端で、赤ちゃんが映った。背中には小さな翼がかわいらしく、台地の上に生えた草原をよちよちとハイハイする姿は私の胸を射止めたのかもしれない。

かもしれない、というのは赤ちゃんがハイハイしている場所が台地の崖っぷちだから。

天使の赤ちゃんは、好奇心からか台地の上から下を覗きこんでいた。各台地の周りには落下防止のフェンスがあるが赤ちゃんの丈には合っているわけなく、簡単に下から通り抜けられる。下に広がるのは薄暗い『地雲』。落ちたりしたら大変なことになってしまう。

『地雲』に落ちたら天界から下界に墮ちるといって都市伝説がある。

「わぁー」

さらに、身を乗り出す赤ちゃん。
そのまま、身体が傾いて。

「あ、危ない！」

私は気付いたときには走っていた。
距離は約20?。橋をすぐに渡り切り、フェンスを飛び越える。

「カナリア!どこなの!」

女性の叫ぶ声が聞こえた。

もしかしたら、この赤ちゃんのお母さんなのかもしれない。

声の大きさからかなり離れているからこっちに呼んでる間に赤ちゃんは『地雲』に落ちてしまっただろう。

崖に着いた私は精一杯に手を伸ばすが、赤ちゃんには届かない。
その間も落ちていく。赤ちゃんの顔が恐怖で歪んでいた。今にも泣きそうな状態。幼少時の天使はでは自分の羽で飛ぶことはできない。
なら助ける方法はただ一つ。

私は崖から飛び降りた。

崖から勢いよく飛び降りた私は『体術』の基礎である段飛びをした。
段飛びは、簡単に言ってしまうえば、2段階ジャンプのようなもの。普

通は上方向にするものを私は下方向に繰り返す。
段飛びを繰り返すことで私の落ちる速度が上がる。ゴオオオオ！！
と耳元で空気が唸る。
すぐに、赤ちゃんに追い付くことができた。

「もう大丈夫だからね」

私は赤ちゃんの手を掴むと、自分の方に引き上げて抱きしめる。

問題はここから、どうやってここから上に戻るかってことだけだね。

私は左翼がないから飛ぶことはできない。

だから、私は赤ちゃんを両手に持つと、態勢が悪い中で上に勢いよく放り投げた。放り投げられた赤ちゃんは真っ直ぐ飛んでいきポスツと台地にギリギリ乗った。

「よかった……………」

私は赤ちゃんの無事に安堵した。

だが、下に顔を向けてみれば、薄暗い『地雲』が見える。

「このまま、あの暗い雲に入っちゃうのかな……………」

そして、私の身体は薄暗い雲に吸い込まれていった。

俺は家に帰ると、母さんが出てきた。

「勝羅、お帰りなさい」

「ただいま。あとで、奈緒が菓子持ってくるから。出迎えよろしく」

「あら、奈緒ちゃんまた来るのね。今度は何を作ってくるのかしら？」

「知らね」

そう言つと、階段を上がつて、自分の部屋に向かう。

「さてと……奈緒が来るまで、一眠りすっかな。最低でも1時間は寝れるだろっ……うん？」

部屋のドアを開けると、意味不明・理解不能な物体が転がっていた。純白と言ってもいいくらいの布と金色の……髪？

「何だこりゃ？」

俺はゆっくりその物体に近づく。

「へ？」

よく見ると、物体は人だった。しかも、女。と言っても、明らかに俺より身長は低い。多分、妹の沙菜さなと同じくらいの身長だろう。

っていうか、なぜ俺の部屋で人が倒れてるんだ？
とりあえず、起こさないとな。

「おゝい、おゝい。……………起きろおおー!!」

指で頭をつつついてみたり耳元で声を出してみるが、起きる気配が全くない。

仕方ないので、俺は自分の中で最低最悪の起こし方をする。だが、他人には迷惑はかからない。

………これをここに入れて うん？小さいから入らないのか。いいや、無理矢理入れちゃえ。……………を最大にして……………最終確認でちゃんと入っているか確認したら、スイッチをポチツとな。

その瞬間、金髪の少女の耳に入っているイヤホンから大音量で曲が流れ始めた。

「うきやあああああ!?!?!?」

直後に、金髪の少女の身体がビククウツ!!と大きく震えた。

ああ、心臓に悪そうだな。

金髪の少女は飛び起きると、耳に入っているイヤホンを乱暴に取った。

「な、何するのよ!」

「あ、起きた?」

俺は何事もなかったように話しかけた。この起こし方は何度見ても楽しい。

「あなた、誰？」

「いや、それはこっちのセリフだから。あんた、誰？何で人の部屋で倒れてたんだ？」

疑問に思ってたことを矢継ぎ早に言った。そしたら、金髪の少女は瞼を上下にパチパチするとすると首を回して部屋を見渡す。

「どこどこ？」

「俺の部屋」

金髪の少女の疑問に間髪を入れずに答える。

「ああ、そうか……………」『地雲』に落ちて気絶したんだった。へえ、こんなところに繋がってるんだ……………」

「訳わからないこと言ってないで、ちゃんと説明してもらえるかな」

「そ、そうだね。これから下界の人間に世話になるんだから、ちゃんと説明しなきゃね」

……………この人、何とおっしやいました？
『下界の人間』？『これから世話になる』？

「私は天界学術院中等部2年ニコ（長いので省略）よ
「は？」

これが、俺とニコの出会い。

第2話 天使（自称）

つまり、こういうことらしい。

この金髪の少女は、この世界と違う天界という場所から来た。というか落ちてきた。さらに、自分は天使（自称）で天界に戻る方法がわからないから、方法がわかるまでの間はこの家で居候したい。

もちろん俺は、

「よし、病院に行こう」

俺は少女を病院に連れて行こうとした。だっでするでしょ？

部屋に入ったら、金髪の少女が倒れてて自分は天使で天界に戻る方法がわからないからこの家に住むだど？そんな漫画やアニメみたいな話があるわけがない。

「信じてくれないの？」

「誰が信じるかそんな話」

「どうしても……？」

「どうしてもだ。そんな作り話をするんだつたら、さっさと本当の話をしろつてんだよ」

「……わかつたよ。もっと現実的な話をすればいいんでしょつ？」

そう言うと、金髪の少女はうんと少し考えると口を開いた。

「私は、あなたに無理矢理この部屋に連れて来られて、私をレイ
「

「待てやゴラ！確かに、もっと現実的な話を求めだが、俺を犯罪者に仕立てあげる話を求めてたわけじゃない！」

俺は即座に金髪の少女の話を中断させた。今、ここで言わなかったらいつ言っただ？それに、金髪の少女は最後の方で何を口走ろうとした？

「ところで、あなたの名前は？」

「ああ、那雲勝羅だ」

「よろしく、カツ……カツだっけ？」

「人の名前くらいは覚えるよ。何でいきなり名前の方なんだ？」

「そんなこと言って、カツだって私のフルネームは覚えてないでしょ？」

それはニツクネームか？

「そんなことないぞ。ニ」……「ニ」……「何だったっけ？」

「ほら、覚えてない」

「そもそも、名前が長いんだよ。覚えられつかての」

人はこれを開き直りと言う。

「そういうことなら、お互い様よね。これから私は貴方のことを力ツと呼ぶね。貴方も私のことをニコと呼ぶこと」

一応筋は通っているせいで反論できない。まあ、互いの呼び方なんてどうでもいいのだが。

俺は話題を切り換えて、この都合の悪い空気を払拭することにした。

「この家に世話になるってのは、本気で言っているのか？」

「本気も何もないの。天界に戻るための方法が見つからないと、どうすることもできないんだから。それとも、この痛いけな少女を外に放り捨てるの？」

「痛いけな少女って……………」

とは言え、外に放り捨てるのは後味が悪い。でも、ここに住むとなるとそれなりの理由がなくちゃな。

「それで、天使（自称）のニコさん」

「（自称）はいらない。まだ信じてないんだね。わかった、なら証拠を見せて上げる」

そう言うと、ニコはくるっとその場で身体を半回転させた。

何がしたいんだ？

「ほら、この翼が何よりの証拠よ」

「翼？そんなもんどこにあるんだ？」

「え？」

ニコの背中には何もなかった。

小さな背中があるだけで、他に何もなかった。強いて言えば、服があるだけだろうか。

「う、嘘でしょ！？」

ニコが手を後ろに回して、背中をぺたぺたと触る。

「え？何でないの！？ちょっと、カツも見てよ！」

そう言われてもないものはない。

その時、ピンポンとチャイムが鳴った。奈緒か。予想より早いな。

……今、来るのはマズいだろ。

仕方ない、部屋に上げないようにリビングで対応するか。

「用事があるから、一旦出ていく。いいか、部屋から出るなよ。お前が俺以外の人に見つかったら大変だからな」

俺は部屋のドアの取っ手を握って言った。

「う、うん………」

ニコはしょぼんとした声で答えた。

1時間後

予想通りの味だった。

奈緒には悪いけど、人に食べさせるものではない。俺は十数年間食べてきた耐性があるから大丈夫だけどな。

最近^{ダークマター}は、未元物質^{ダークマター}から暗黒物質に成長した。

『この世にない物質』から『この世にある物質』になったという意味だ。

十数年かけてこれでは先が思いやられる。

さて、ニコはおとなしくしてたかな？

俺は部屋のドアを開けた。

「何をやっている？」

「ほえ？」

部屋にいたニコは本棚から引っ張り出したと思われる漫画をパラパラと読んでいた。

アニメや漫画みたいに主人がいない間に部屋がぐちゃぐちゃになっていることはなかった。
これはこれで一安心。

さて、本題だ。

「100歩譲って、ニコを天使だとしよう」

「本当に天使になんだけど」

『ようやく、見つけたぞ、ニコ』

「ひいおじい様!」

いきなり天井から声が聞こえてきた。

俺は驚いて首を上に向けるが、ただ天井が見えるだけだった。

俺の部屋で超常現象が起きている……!

ニコがひいおじい様と反応しているから少なくとも訳のわからないやつではないな。

それにしても、ニコの言ったことは本当のことだったんだな……。あとで謝つとかないと。

「ひいおじい様、私を捜しに来てくれたのですか?」

『そうじゃ。お前さんが地雲に落ちたと聞いてな。急いで界視鏡アラウシキョウで捜したのだ。今は界視鏡ごしに話している』

「それでは、私は天界に戻れるのですね?」

ニコが嬉しそうに言った。ニコが見つげられたのなら、天界に帰ることになる。

『そのことなのじゃが……残念ながら、天界に帰すことはできないのだ』

「え……！？」

マジかよ……。

「ニコよ。お前さんがこの世界に来てからどれくらいの時間が経つ？」

「えっと……」

「約2時間くらいだ」

俺がニコの代わりに答えた。

俺が帰ってきたのは17時くらいで今は19時過ぎだ。

『ニコの隣にいるのは、人間じゃな？』

少しイラッとする言い方だな。

「そうです。この世界に来た私を助けてくれました」

『おお、そうかそうか。ニコが助けてくれた礼はあとでさせてもらうとしてよう。それで、この世界に来て2時間というのは本当か？』

「多分それくらいです。何か問題が あ」

ニコは途中で言うのを止めると、いきなり俺に飛びついて、ものすごい勢いで肩をガクガク揺るし始めた。

「ねえ、今何か起こってないわけ！？ねえ！？」

「お……おい、ちょっと待って……」

なんだか知らないけど、俺の身体をニコは残像を残すような速度で揺すってくる。

早く止めないと、俺の肩が外れ
（ゴキユゴキユ）
両肩が外れたじゃないか。

「痛アツ!?!」

「あ、ゴメンゴメン」

（ゴキユゴキユ）
外れた肩に気付いたニコは無理矢理戻された。この痛みも尋常ではない。
ひい爺さんの声がニコを落ち着かせる。

『ニコよ。それくらいにしときなさい。人間が話せないではないか』
ひい爺さんの声がニコを落ち着かせる。

ニコは言われた通り俺から離れた。

『人間、これを説明する前に1つ聞かせて欲しい。周りで空間の歪み いや、異常現象は発生してないか?』

「唐突になんだよ。そんなもん起きてねえよ。今日も至って普通の1日だ」

『それを聞いて安心じゃ。では、説明を始めるとしよう』

ニコのひい爺さんからの説明はこうだった。ニコも途中から説明に加わった。

まず、天使というのは力　まあ、存在の力みたいなのが大きすぎて、天界のような上界以外の下界、つまり人間界はその1つにそのまま現れることができないらしい。もし、そのまま現れようとすればその下界全体に『圧力』をかけられ、その状態が30分も続けば『世界の崩壊』が始まってしまふ。

さて、ここで問題に上がるのが、ニコの存在だ。

ニコはこうやって現実にいる。

2時間以上がたった今、30分で起きる『世界の崩壊』が始まっていると考えるべきなのだが、

「何も起きてないよな」

俺の見た限りではそんな異常現象みたいなことは起きていない。もしかしたら、世界の隅っこで起きているかもしれないけど『世界の崩壊』は原因であるニコの周りから始まるらしいからこの説は没。

ちなみに、この日常から掛け離れた説明を受けている間は俺は黙って聞いていた。天使だの『世界の崩壊』だの言われても驚かない。世の中は意外と中二病で満ちているのだ、と俺は世界に対する認識を改めている。

話を戻すが、じゃあ、なぜこうやってニコが現実にいるのに『世界の崩壊』が始まらないのか？　の前に、

「何でそんな大事なことを忘れてんだあー!!」

俺の怒号にニコが身体を小さくする。

今は起こってないからいいけど、下手したらこの世界はニコのせいで崩壊していたかもしれないのだから。

「ゴメンって言ってるじゃない。そんなに怒らなくても……」

若干、ニコが涙目だ。

少し怒りすぎたかな、少し反省しよう　と思っただが、事の重大さを見ても怒り足りないことがあっても怒りすぎはないだろうと思っただ。

とは言っても、女性の涙は見たくないの、怒るのは止めた。

「それで、何でこの世界にニコがいるにも関わらず『世界の崩壊』が始まらないわけ？」

『私でも信じられないような話なのだが、今のニコは天使の「圧力」を抑えるほどの「殻」の中にいるのだ』

「は？」「殻」？

俺は言葉の意味がわからない。

ニコもイマイチわからないような顔をしている。

『そこにいる人間に解りやすく説明すると……常時核爆発を起こしているニコに絶対防御の核シェルターの中にいるようなもの、と言えばわかるじやろうか?』

自分の曾孫を原爆に例えんじやないよ。
だけど、なんとなくわかった。

つまり、今のニコの身体は天使の『圧力』を抑えるようになってい
るのだ。だから、2時間以上経った今でも『世界の崩壊』が起こら
ない。

「じゃあ、私の翼がないのはその『殻』というやつのはせいなのす
か?」

『そうじやな。今のニコは天使級の力を持った人間の状態ってとこ
ろじやろ?』

「では、私が天界に戻れないのはどうしてなのですか?」

ニコが見えないひい爺さんに言う。

これが最大の点だ。

だけど、今までの説明から見るに、ニコは絶対に天界に戻れないの
だろうと思った。

今のニコに天界に戻る方法があるのなら、見つけたときにさっさと
帰してしまうだろう。

『世界の崩壊』というハイリスク　これは天界が下界の崩壊を気
にしている話だ。気にしていなかったら放置だろう　を承知でニ
コを下界に置いとくとは思えない。

わざわざ人間の俺にまで説明したんだから、大層な理由だと思う。

『原因はわからないが「殻」がニコの身体や魂と密接に繋がってしまい、取り外せなくなってしまうのだ。今、無理に「殻」を外すと、ニコ自身の魂や身体まで取り除く危険性があるのじゃ。今はニコを天界に帰す方法を探しているところじゃ』

つまり、今のニコの状態はデリケートだから迂闊に手を出せないってことか。

「ど、どうして……どうして!?! 私ばかりこんな目に合うの!?!」

ニコの目に涙が浮かぶ。

それはそうだろう。見た目からして13〜14歳の少女が故郷に帰れないのだから。

親にも学校の友達にも会えない。

1人だけ全く知らない世界で1人ぼっち。辛いことこの上ないだろう。

俺はポロポロ涙を流し始めたニコの頭の上にポンと手を置いた。

「1人じゃねえだろ」

「え……?」

「俺がいる。俺だけじゃない。この家には沙菜や母さんや父さんだっている。世界にただ1人ぼっちみたいな言い方をするんじゃない!」

俺は勢いに任せて言葉をニコにぶつけた。ニコの心に響く言葉が1つでもあつたらいいと思いつながら。

「このひい爺さんだつて言つてたじゃないか。ニコを天界に帰す方法を探してつて。今は帰る方法が全部なくなつたわけじゃない。いくつもある方法の中の1つが消えただけだ。まだ希望が潰えたわけじゃない。泣くのは全ての希望が消えたときにしろ。まだ泣くのは早いぞ」

いつのまにかニコの涙は止まっていた。

ポカンと口を開けて俺を見ている。だが、その表情はすぐに笑顔に戻つた。

それは、とびつきりの笑顔だつたと俺は記憶している。

その後、ひい爺さんの情報操作のおかげでニコは俺の家に居候することになった。もちろん、ひい爺さんがニコを帰す方法を天コを帰す方法を天界で探すまでの間だ。

第2話 天使（自称）（後書き）

急展開スイマセン。

作者が早く本編に行きたいもので（^^）；

構成がなってませんね。

これは作者の未熟さっていうことでしょう。

プロローグ終わったら、人物紹介と設定について書きたいと思いません。

第1話 テスト開始(前書き)

駄文ですね。

申し訳ありません。

第1話 テスト開始

時は午後9時、場所は俺の部屋。

『明日、人間を《テスト》する』

ニコのひい爺さんがいきなり言い出した。

俺は、何を言ってるの？、とひい爺さんを見た。見たと言っても、天井を見上げただけだ。

ちなみに、ニコは部屋にいない。あの後、妹の沙菜さなと風呂に入りに行ったのだ。

ひい爺さんの情報操作のおかげで、ニコはこの家にホームステイする留学生ということになった。もちろん、通う学校は俺と同じ伏獅成中央高校だ。

明日中に手続きとかして、明後日からニコは通うらしい。

あ、今はそんな話よりもひい爺さんの話だよな。

『人間、名前は？』

「そついえば言ってなかったな。那雲勝羅なぐもかつらだ。ひい爺さんの方も名前なんだよ?」

『いや、私のことはひい爺さんのままでよい』

「相手に名乗らせといて、自分は名乗らないか?」

『別に気にすることでもなかるう。私の名前を知ったところで、ナグモの人生に何の影響もないじゃろ』

教えないんかい。

それもいきなり呼び捨てかよ。

「ま、いいよ。今まで通り、ひい爺さんと呼ばせてもらっよ」

『それでいいのじゃ、フオツフオツフオツ』

ひい爺さんが笑う。

イメージがサンタなんだが……。

「それで《テスト》って何なんだよ？頭使うのはやめてくれよ。自慢じゃないが、頭は良くないからな」

『そんな心配はいらないぞ。まだ内容は決めていないが、そんなに頭を使うようなものにはしないつもりじゃ』

「なら、いいけど」

俺は適当にひい爺さんの言葉を適当に聞き流しながら、3キロのダンベルを両手に持って上げ下げする。

これは毎日の習慣でやってる。

『お、そうだ。ニコを助けてくれた礼をしないと。何がいい？何でも言ってみよ』

「礼なんていいよ。別に助けたって言ってもそんな大層なことはいないし」

事実、俺は何もやってない。

『私が礼をしたいのだ。さ、何でも言ってみよ』

「そう言われてもな……………」

今は特に欲しいものとかはない。

だけど、こんな機会は滅多にないし、何かないかな。

『そうじゃ。ナグモの能力を開花させてやろう』

「能力を開花……………」

またひい爺さんがわけのわからないことを言い始めた。

『全ての生物は色々な能力を秘めているのだ。しかし、その能力を開花させる者は極わずか。人間界でも、偶然に開花させているのは10人弱じゃ』

「ふ〜ん。で、俺の能力つてのを無償で開花させてやろうというところか？」

『そういうことじゃな』

いよいよ中二病全開になってきたな。

だが、断るつもりは毛頭ない。

現実世界でアニメや漫画みたいな能力が持てるのなら、断る理由はあるはずがない。

「よし、わかった。能力の開花を頼む」

その日、俺は人間界で言う超能力者になった。
能力は『マテリアルパスル素材構築』。

sideニコ

時は午後9時半。場所は客室。

この客室で和式で畳が敷かれていた。

天界には風呂やシャワーなどなかったために、ニコは沙菜さなと一緒に風呂に入って使い方を教えてもらう必要があった。

天界の普段着であった羽衣には高度な清浄効果があり、風呂やシャワーに入る必要がなかったからだ。

風呂上がりのニコは、客室の椅子に座って沙菜にドライヤーで髪を乾かしてもらっていた。

「ニコさんの髪キレイですね。さらさらしていて、くせっ毛一つありませんね」

「あ、ありがとう……………」

実は、ニコはこんな風に同じ年くらいの女子と話すことはあまりなかった。

ニコの家系は天界の中でも有数の貴族で、天界の頂点に位置する神様という役職にいるのは曾祖父だ。

そんな曾祖父の曾孫であるニコは周りの生徒から一目置かれていた同時にどこかよそよそしかった。

憧れや羨望など色々な感情を持たていた。もちろん、それが嫌いなわけじゃない。

しかし、たまに思った。

皆と同じ場所に立ちたいと。

同じ場所に立つて家柄など気にしないで、分け隔てなく話して遊びたかった。

だが、現実はそのを許さなかった。

『あの事件』のせいで左翼を失ったニコは『魔法』を使えなくなり、今では単位が満足に取れない始末。それを、両親や祖母、周りの親戚たちも、よしとは思わないのは当たり前だった。

家族からプレッシャーを受け『魔法』でダメなら他の補うしかなかった。必死こいて『学問』と『体術』を学年1位までにした。

それでも、ダメだった。

『魔法』ができないと、そこばかり批難されてしまい、他もダメにしてしまう。

ニコは、一族の落ちこぼれにされてしまった。

他でどんなに頑張っても『魔法』できなくてはダメだった。『完璧』
これが一族が求めたものだった。

その家族の中でもニコを見てくれたのは曾祖父だった。

「ニコ、ニコさん……？」

沙菜が心配そうにニコの顔を見た。

その顔には一滴の涙が流れていた。

side 勝羅

次の日。

俺は、教室の窓側の1番後ろ席で寝ていた。前で数学の授業をやっているが、気にしない。

昨日、俺は超能力者になった。

能力の名前は『マテリアルパスル素材構築』。

自分を中心とした半径1メートル以内の物質　原子や分子を『素材』と規定し、その『素材』を分解・増殖・構築することで別の物体をつくることができる。

例えば、ここにシャープペンシルがある。このシャープペンシルに含まれる鉄原子を『素材』と規定し、分解・増殖・構築することで刀をつくることができる。別につくる物が刀でなくてもいい。槍だ

つてつくれる。ただ、鉄原子だけでそれらをつくると、柄や鐔がない刀や槍になってしまい、非常に持ちにくくなってしまふ。他にも応用の仕方は色々思いついたが、後々で紹介するつも。

『起きてるか？』

「うわッ！」

突然の声に俺は驚いた声を出してしまった。

「那雲、どうかしたのか？」

俺の奇声に教壇に立っている先生がこっちを見てきた。

さらに、クラス全員の視線が俺に突き刺さる。奈緒も心配そうな顔でこっちを見ていた。

そんな目で俺を見ないで！

「え、えっと……頭痛いんで、保健室行ってきます！」

俺はそう言うと、教室を走り出て、屋上へ向かった。

今は授業中で当たり前前なのだが、屋上には誰もいなかった。

「ここなら誰もいないし話せるな」

『わざわざ、教室を出る必要はなかったんじゃないかな』

「それだと、ひい爺さんの声が周りに聞こえちまうだろ」

『いや、ナグモの心に直接話しかければ周りには声は聞こえない』
それって、俺の心の声が全部筒抜けになるんじゃないか？

バレちまうじゃないか。ひい爺さんの悪口だとかひい爺さんの悪口とか……………。

『失礼なことを考えてないか？』

「何でもございません」

『まあ、いい。それよりも昨日言った通り《テスト》を始めるぞ』
そんなこと言ってたっけか？

昨日は自分の能力で頭一杯だったからあんまり覚えてないや。

「それで《テスト》って何やんだよ？」

『では《テスト》の内容は お、ちょうど来たようだ。門の
ところを見てみる』

「門のところ？」

言われて、フェンス越しに門のところを見たら、4台の黒いトラックが門から入って来ていた。

その4台の黒いトラックは3方向に別れて、東昇降口の方に1台と西昇降口の方に1台といった具合に校舎の影に隠れて行ってしまった。

残りの2台は俺がいる中央校舎の真下に位置する中央昇降口の前で停まった。おそらく、東と西の昇降口に向かったトラックもこんな感じに停まっているのだろう。

停まった2台のトラックの運転手席側から、黒いパーカーのようなものを着て頭に黒いニット帽を被った人が降りてきた。真上から見ているために男か女かわからないし、服も詳しいところまではわからない。

降りてきた2人の運転手は自分のトラックの荷台に回り扉をほぼ同時に開けた。

扉を開けると、運転手と同じような格好をした20人前後の人間が1つの荷台から出てきた。荷台は2つあるから、合わせて40人前後だ。

さらに、荷台から降りてきたその1人1人の手には、

「銃!？」

ドラマでよく見るようなマシンガンの形をした1メートル弱の銃が握られていた。

その40人はきちんと整然とした並びで次々に中央校舎に入っていく。

2人の運転手は全員降りていくのを確認してから荷台の扉を閉めて、運転席に乗った。2台のトラックは東昇降口の方へと向かった。

「どづいづことだ!?!？」

『どづいつことして、これが《テスト》じゃよ』

ひい爺さんはいつもの平淡な声で言った。

『この《テスト》の内容は、この学校に侵入したテロリストの殲滅
じゃ』

「テロリストだと………!?!」

『もちろん、殲滅と言っても殺生するでないぞ。殺生はせずに気絶
か戦闘不能にすればいいからな』

「何でこんなことする!?!」

「ふむ。これはナグモを試す機会じゃ。だから《テスト》という形
で見させてもらおうと思っとな」

「そんなことのために、学校の生徒や先生まで危険に晒すのかよ!
沙菜だっているんだぞ!?!」

『そうじゃ。それだけこの《テスト》には意味がある。ちなみに、
言っとくが拒否はなしじゃよ。現実はまだ《テスト》は始まってい
るのじゃからな』

「……………わかった」

もうじたばたなんてしてられない。

絶対にテロリスト共をぶっ倒してやる。

『やる気になったようじゃな。今からルールを説明するから、よく

聞くんじゃぞ』

俺はひい爺さんの言葉を待った。

『ルールは4つじゃ。』

1つ、能力の使用を認めるがテロリストを殺してはいけないこと。
2つ、この学校にいる生徒先生全員をどんな方法を使っても必ず守ること。

3つ、テロリストに殺されないこと。

4つ、《テスト》を正午までにクリアすること。

もし、この4つのどれかが破られた場合は、その時点で《テスト》失敗じゃ』

「もし《テスト》を失敗したときはどうするんだ？」

「そのときは、お前さんの存在全部を消させてもらうつもりじゃ」

つまり、死んだとかじゃなくて、俺の出生とか全部を存在ごと消すってことかよ。これだと誰の心にも思い出は残らないよな。ある意味、死ぬより辛いな。

俺は、屋上を飛び出した。

第1話 テスト開始(後書き)

やっと沙菜を出せた……！

でも、出番少ないです。

第2話 国際テロ組織『神の遣い』（前書き）

何でしょう。

前のサブタイトルと今回のサブタイトルのギャップの差は？

第2話 国際テロ組織『神の遣い』

俺は階段を駆け降りながら、具体的にどうするべきか考えていた。

まず思いついたのは生徒の安全の確保だ。

1つ1つクラスを回って避難を呼びかけるか放送で一気に避難させるか 無理だ。

そんなことをしているうちにテロリストたちは学校を占拠するために階段を上ってくるし、生徒の移動にしても2、3分はかかってしまう。そもそも、そんな大人数をどこに避難させる。伏獅成中央高校は1つの学年だけで13クラスもあるマンモス校だ。唯一生徒全員が入れる体育館は校舎から外れたところにあるが、移動しているときにテロリストに見つかって撃ち殺されるのがオチだ。

せめて、奈緒と沙菜の安全を確保したいが、そんな時間もないだろう。

俺は舌打ちしながら、階段を降りて、

武装したテロリストの一団と鉢合わせになった。

「は？」

目の前にいるテロリストの合計は8人。

それぞれの手には1メートルくらいの大きなマシンガンっぽい銃。もしかしたら、ショットガンかも。

さらに、よく映画やゲームで出てくるような至るところにポケット

が ついた服は、屋上で見た通り黒い色だった。1つ違ったのは、頭にはニット帽ではなく同じ色をしたヘルメットをかぶっていた。

「そこで、何をやっている？」

8人の中の1人が聞いてきた。

「えっと……」

聞かれた俺はというと　　ダッ！と回れ右してさっき降りてきた階段に走る。

その直後にダダダダダダダッ！！とマシンガンの銃口から火が噴いた。

オマエらには人を殺すことに躊躇いはないのかああーッ！！と心で叫びながら階段を駆け上がる。

「今の生徒は俺が始末しとく。お前らは作戦通り各クラスの制圧をしろ」

「了解」

逃げた俺のことを追いかけてくるらしい。

冷や汗をタラタラ流しながら俺は屋上のドアを開けると、転がり込むように外に出た。

「動くな」

その言葉だけで俺の動きは止まった。
恐る恐る後ろを見てみれば、ドアのところまで男がこっちに銃を向け
ていた。

俺は意を決して声を出した。

「こんなところで俺を殺しちゃっていいのか？人質は多い方がいい
だろ」

「命乞いか？生憎とこの学校には人質はたくさんいるんでな。1人
や2人殺そうが構わないさ」

まあ、当たり前か。

アニメや漫画のように、これから殺す奴の命乞いに応じるなんて逆
転フラグ全開だしな。

……………こんなときに、そんなことを考えてどうすんだ！！

今は目の前にテロリストに集中すんだ。

何か打開策は……………いや、あるっちゃあるんだが、ぶっつけ本番で
やるのはマジ怖い。

「さあ、10秒くれてやる遺言でも考えてろ」

よし、逆転フラグ全開。

俺は『マテリアルパズル素材構築』をあることに使ってからテロリストに向かって走
った。

テロリストの方も俺の行動は予想外だったらしく驚いたようなそぶ

りを見せたが、すぐにマシンガンを構え俺に狙いを定め引き金を引いた。

ガガガガガガッ！とマシンガンから何十発の銃弾が飛び出た。それらの銃弾の中には俺の脇を外れていくものはあったが約9割の銃弾の延長線上には俺の身体があった。

もともと、そんなに距離も離れていないためこんなに銃弾が当たるわけだが、俺は構わず走った。

そして、飛んできた銃弾は俺の身体に触れる　ことはなかった。全ての銃弾が、俺の身体あと少しのところまでペシャンコに潰れたからだ。

まるで、固い壁に当たったかのように。

潰れた弾丸はカランカランと虚しく床に転がった。

「何いっ!?!」

今度こそテロリストの顔が驚愕の表情になる。

その間に俺はテロリストの距離を詰め、右手に持っている『素材構築』でつくった武器をテロリストの腹に叩き込んだ。

「ぐばがああっ!?!?!」

ゴバアッ!と周りに衝撃が拡散しながら、テロリストの身体が面白いうように吹き飛び、後ろにあった校舎の壁にドンツ!と激突した。

テロリストはその衝撃で気絶したのか動かなくなってしまった。

……生きてるよな？

俺は恐る恐る倒れているテロリストに近付き首筋に手を当てた。俺の頭の中では実はまだ気絶してなくて、俺が近付くのを待っているのではないか、という警戒音が鳴り響いていたが、現実には上手いことたようだった。

「なんとかいったな。どこのアニメや漫画だよ。武装したテロリストに普通の高校生が勝つなんてさ」

いや、超能力があるからもう普通の高校生じゃないか。

それにしてもぶっつけ本番だったけど、上手くいってよかった。

銃弾を防いだのは、周りの窒素を『素材』と規定した絹旗最愛きぬはたさいあいの『オフエンスアーマー窒素装甲』を基盤にした『オフエンスウオール窒素防壁』
自分で命名　という防
御技だ。

『窒素装甲』は身体から数センチと薄い装甲で銃弾は防げても衝撃は防げないものだが、『窒素防壁』はもつと厚く固くして、衝撃をも防ぐ。

これなら銃弾を何発浴びても大丈夫だろう。

ただ『窒素防壁』は目に見えないから銃弾が飛んできたら、ビクついてしまうのは仕方ないことだったりする。

そして、テロリストを吹き飛ばしたのは『ボンバーランス素材構築』でつくった『窒素爆槍』だ。

これくらいなら空気中にある窒素分子を固体に形態変化させればできること。

「とりあえず『窒素防壁』と『窒素爆槍』があればテロリストだつて倒せるだろ」

その時。

気絶したテロリストの懐にある無線機から声が聞こえきた。

『おい、いつまで子供相手にしている。作戦を実行するから早く』

「作戦つて何だよ？」

『ッ！！？！』

無線機から息を呑むのがわかるが、構わず俺は片手に無線機を持って話す。

「この無線機の持ち主さんはそこで気絶してるぜ。テロリストと言つても、たいしたことないんだな」

俺は敢えて挑発するような口調で言った。

『調子に乗るなよ！クソガキが！！』

ブツツ！と無線機が切れる。

一息吐いてから、俺は気絶しているテロリストから何か使えそうなものを探し始めた。

『ピンポーン、パポーン』

今度は放送が入った。

この時間に放送ということは。

『こんにちは、諸君。もう気付いていると思うが、ここで改めて自己紹介をさせてもらおう。我々は国際組織テロ組織「神の遣い」というものだ』

「ブツ！」

俺はその組織名を聞いた瞬間噴いた。

そんな国際テロ組織なんて聞いたことないって。ひい爺さんも適当に名前つけんじゃねえよ。

『我々はこの学校を占拠した。抵抗する者は全力で排除し、我々の命令に逆らう者は容赦ない制裁を加えてやる』

頼むから誰も反抗なんてしないでくれよ。俺のいないところで反抗して殺されたりしたら《テスト》失格になっちまうからな。

そんなことを祈りながら、俺はテロリストのポケットからスタンガンを見つけて制服のズボンの後ろポケットに閉まっておく。

できたら、使いたくないな……………。

『まずは、クラスの代表2人。その場に10秒以内に立て』

「何ッ!?!」

人質の選出のつもりか!?!?

『10・9・8……・2・1・0。時間切れだ。まだクラス代表が立ってないところがあるようだ。君たちのことだよ、1 Eの生徒諸君。さっさと立ちたまえ。それとも、目の前で自分のクラスメイトが傷付くのが見たいのか？ ふむ。立ってくれたようだ。』

マズいぞ。

この目の前で起きていることを話すような口調ぶりから、各クラスの教室や特別教室に仲間のテロリストから随時無線機で連絡を取り合っていることは間違いない。

それに、この短時間で各クラスを制圧するなんてこの広い学校の校舎を熟知しているとしたか思えない。

先生たちがいる職員室は既に制圧されてしまっているだろう。

『立ったクラス代表2人は、10秒以内に廊下に出ろ』

このままでは各クラス代表2人が人質にされてしまう。

俺のクラス代表は奈緒なんだ。それに沙菜もクラス代表だ。

この2人を人質なんかにはさせるわけにはいかない。

しかし、どうやって助ける？

廊下には、各クラス代表2人とそれを監視するテロリストたちがいるから、今からドンパチ始めるのはマズい。

『全員廊下に出たな。では、私の部下が誘導するからついていくよ』

そこで、放送は終わった。

とりあえず、人質になったクラス代表2人が1カ所に集まるのを待ってから助けに行こう。

第2話 国際テロ組織『神の遣い』（後書き）

次からは1週間に1回くらい更新できたらいいなと思っています。

『素材構築』について質問があればドシドシ聞いて下さい。

ちなみに『素材構築』はつくるだけじゃありません。

これについては、後々出していくつもりなので、よろしく願います。

第3話 テスト終了(前書き)

昨日の夜、奇妙奇天烈な夢を見ました。

『一方通行にサッカーを教えている夢』

はい、奇妙奇天烈ですね。

作者は、サッカーができないのに。

しかも、その教えている内容が『サッカー選手がコーナーキックで蹴るような、横スピンのかかったボールの蹴り方』です。
もう訳がわかりません。

というところで、どござ。

第3話 テスト終了

side 那雲勝羅

待つこと10分。

現在、俺の足元には20人ほどのテロリストが転がっている。俺を排除するために、襲撃してきたテロリストたちだ。

そして、俺は平等に気絶させてやった。

「もし、起きても縛りつけてあるから大丈夫だろ」

気絶させたテロリストたちの武装を解除させて、屋上フェンスや床に使われている鉄と石でつくった手枷と足枷をはめ込んである。極め尽けには、フェンスや床を形態変化させて、テロリストを一くりにして縛っておいた。

「そろそろ、行くか」

俺は屋上を出た。

side 那雲沙菜

つい20分前、私は普通に授業を受けていました。

でも、今は、

「おらぁ！さっさと歩け！」

人質になってます。

学校にを占拠したテロリストに人質にされて校庭を歩いてました。

私の他にも、各クラスの学級委員がいました。ここにいる人数は、学級委員2人×13クラス×3学年＝78人です。

学級委員の中には、兄さんの幼なじみの奈緒さんもいました。

それにしても、なぜ校庭なのでしょう？

てつきり、どこかの部屋に監禁されるのかと思ってました。

「よし、止まれ。そこに座ってる」

校庭のど真ん中です。

このテロリストたちが、本当に何をしたいのかわかりません。人質にしたんですから、身代金を要求でしょうか？
だったら、ここに連れてきた意味は？

私はふと、辺りを見回したり座っている私たちに目を向けるテロリストたちを見ました。

なんだか、私たちの監視よりも周りを警戒しているような気がします。

「（沙菜ちゃん、大丈夫だった？）」

「（な、奈緒さん！？）」

私に声をかけたのは、奈緒さんでした。

いつの間に近付いたのでしょう。
全然、気が付きませんでした。

「（シート。話しているのが聞こえちゃうでしょ）」

「（す、すみません……………）」

奈緒さんは、口元に人差し指は当てながら言った。

「（沙菜ちゃんは、大丈夫みたいだね）」

「（奈緒さんも無事で何よりです。それで、あの……………兄さんの方は？）」

兄さんも昔から無茶なことをやる人ですから、テロリストたちに反抗してないか心配です。

「（テロが起こる直前で、保健室に行つたよ。カツのことだから、保健室に行かないで、屋上とかで寝てるかもしれないわね。もしかしたら、こんなテロが起きていることすら知らないのかもよ）」

「（……………兄さんならありえますね）」

「おい、そこ！何を話している！」

「え？」

急にテロリストが私たちの方を見て、言いました。

「そこのお前。こっちまで来てもらおうか」

テロリストの1人が私に近付いてきて、いきなり私の腕を掴みました。

「きゃ！」

「沙菜っ！」

奈緒さんが立ち上がってくれました。

でも、私の腕を掴んでいるテロリストが無言で拳銃を突き付けて黙らせました。

「奈緒さん、私は大丈夫ですから」

「沙菜……………」

奈緒さんが心配そうに見てきました。

「こっちに来てい」

テロリストは私の背中を拳銃で押しながら、集団の外に出させます。人質になっている学級委員たちの目が私に向いていました。

「どこに連れていくつもりですか？」

私は強気で聞いてみましたが、テロリストは何も答えてくれませんでした。

そして、学級委員たちから100メートルほど離れたところでしょうか。

「おい、俺の妹に何してくれてんだ？」

突然、声が聞こえたかと思ったら、後ろにいたテロリストが吹き飛びました。

吹き飛んだテロリストは、そのまま気絶したのか動かなくなりました。

「沙菜、大丈夫か？」

「兄さん……………」

声が出た方向を見ると、こっちに手を振る兄さんがいました。

「に、兄さあーんっ！！」

私は思わず兄さんに抱き着いて、兄さんの胸で泣きました。

「怖かった…………怖かったですよ！」

「ああ。もっと早く来れなくてすまなかったな」

「兄さん、兄さん……！」

私はしばらくの間、泣き続けました。

side 那雲勝羅

沙菜が俺の腕の中で泣き止むと、顔を真っ赤にして俺から離れた。

それにしても、驚いたな。

『ボンバーランス 窒素爆槍』で屋上から飛んできて 『窒素爆槍』の加減がわからなくて、墜落しそうになったのが度々 校庭の中心に集まっている人質の真上からテロリスト共を急襲をかけようとしたら、こっちに沙菜が連れて行かれるのが見えて、迷わずこっちに進路を変更したわけだ。
まさか、沙菜がテロリストに連れてかれるなんて考えてなかったからな。

「兄さん、助けに来てくれてありがとうございます」

「沙菜が無事で何よりだ」

「私は大丈夫です。それよりも兄さんは大丈夫なんですか？銃で撃たれたりしてませんか？」

「大丈夫だ。問題ない」

「兄さん聞いて下さい。あそこにクラスの学級委員たちがいるんです。だから……………」

「わかってる。俺が助けに行くから、沙菜は校舎の裏にでも隠れてくれ」

「ダメですよ！兄さん1人でなんて無理です！テロリストたちは銃も持ってるんですよ！撃たれたりしたら、死んじやいますよ！」

「大丈夫さ。俺を誰だと思ってるんだ？」

「私のたった1人の兄です」

「なら、心配ないだろ？」

「そういう問題じゃありません〜！」

沙菜がぷくーっとなら顔を膨らませながら言った。

「さて、こんなところで長話なんかしてたら、そのうち見つかったまうな。移動して」

ダンッ！

ピュン！と俺たちの近くの地面の土が跳ねた。

銃撃か！

テロリスト共の方を向くと、ざっと100人くらいのテロリストがマシンガンを持ってこっちに走ってくる。

「沙菜！俺がここで足止めするから、その間にお前は校舎の裏に隠れてろ！」

「そ、それだと、兄さんが……………！」

「心配するな。俺はお前の兄だろ？」

「わ、わかりました。でも、絶対に私のことを迎えに来て下さいよ」

「おう！」

沙菜が校舎の裏に走っていく。

「さてと、お前ら覚悟はできてんだろっな？」

このセリフって死亡フラグだったか？

俺は地面を蹴ると、真っ直ぐテロリスト共に突っ込んだ。

ガガガガガガッ！！とマシンガンの銃口が火を噴くが、屋上と同様に俺は構わず走る。

さらに、飛んできた銃弾は『オフエンスウオール窒素防壁』に阻まれて俺の身体に届かない。

「おい！何をやっている！ちゃんと撃ちやがれ！」

「当たっているはずだ！でも、倒れねえんだよ！」

「弾が当たらないから、倒れねえんだよ！」

テロリストたちが互いに叫びあっている。これで、仲間割れでもしてくれればいいんだけどな。

俺は両手に少し威力大きめの『窒素爆槍』をつくると、それを前方にいるテロリスト共の地面近くに向けて投げた。

ボンッ！！

一気に土煙が舞い上がり、

「くくくあああつ！！？」

テロリスト共の身体も舞い上がる。

10メートル近く上がった身体は、大きく弧を描きながら地面に落ちた。

はい、全滅です。

あの高さから落ちたら、まあ骨折くらいだろうな。打ち所悪ければ即死か……ヘルメット被ってるから大丈夫だろう。

俺はまだ巻き上がる土煙の中を突っ切って、人質の元へと走る。

砂は『窒素防壁』で目に入る心配はなし。

すぐに土煙の中を抜け、人質を取り囲むテロリスト共と会った。

テロリスト共は驚いた顔をしている。

まあ、当たり前だろう。

一瞬のうちにして、10人のテロリスト共が1人の高校生に負けたのだから。

テロリスト共は、銃を向けて一斉射撃してくるが、もちろん『窒素防壁』で全て防がれる。

頼むから、流れ弾とかでクラス委員たちに当たるなよ……………。

1番近くにいたテロリストに『窒素爆槍』を叩き込み気絶させる。

その後も、無双みたく次々とテロリストを戦闘不能にしていく。

だが、やっぱり最後の1人は、

「動くな！動いたら、コイツを殺すぞ！」

こうなるわな。

「おいおい、俺に人質なんて　　ッ！」

「カツ！！！」

人質にされているのは奈緒だった。

「おい、少年。どんな方法をやったかは知らないが、こいつの命を惜しければ、おとなしくしろ」

その言葉に構わず、俺は奈緒を人質に取っているテロリストに歩を進める。

「動くな、と言っているのが聞こえないのか！」

歩を止めた。

俺とテロリストの距離は、1メートル弱。つまり『マテリアルパズル素材構築』の有効範囲。

「何とか言ったらどうぐあっ!!?」

突然、テロリストが叫び出した。

それもそのはず。今のテロリストの両足には、地面から生えた鉄の棘が貫通した状態で刺さっている。

この鉄の棘は、俺が地面の中にある『素材構築』でつくり出したものだ。

「奈緒を人質にした罰だ」

「カッちゃん!」

テロリストが苦しみ出したおかげで、捕まっていた奈緒が拘束から逃れて俺に向かって跳び込んできた。

「怖かったよ、カッちゃん……………」

「ああ。よく頑張ったな」

俺は片手を奈緒の背中に回して抱き留めた。

テロリストの方に目を向けると、自分の両足が串刺しにされていて苦し悶えている。

「よし、これで人質救出だな」

その後。

俺と奈緒たちは校舎の裏に隠れている沙菜を見つけて、一緒に隠れているように言ってから、各クラスにいるテロリストを順番に叩きのめしていった。

13組×3学年＝39組もやるのは骨が折れた。尚且つ、隣のクラスに争った音が聞こえないようにしないとダメなので大変だった。さらに、職員室や事務室にいたテロリストも同様に。

放送室にいたテロリストのリーダーも『窒素爆槍』で気絶させた。

そして、これで終わりかなと思った、その時。

『テロリストを全員倒したようじゃな』

何も前触れなく、頭に話しかけてくるジジイの声。

「これで《テスト》も終わりか？」

『そうじゃな。《テスト》は申し分ない合格じゃ。能力の方もだいぶ使いこなしてきたみたいじゃな』

「まだまだだよ。このチート能力の応用パターンはこんなもんじゃないはずだ」

『では、元に戻すから目をつぶっておくのじゃ』

「は？元に戻すって何を……………」

次の瞬間、目の前が真っ白になった。

「うっ……うっ……」

俺は目を覚ました。

確かひい爺さんが、元に戻す、なんてことを……。

「はぁ!?!」

「うん?どうしたんだ、那雲?」

俺の奇声に、教壇に立って黒板に数式を書こうとしている先生が聞いてきた。

「い、いえ、なんでもありません」

「そうか」

先生は黒板の方を向いて数式を書き始める。

「(ど、どうなってんだ……?何でみんな、普通に授業やってんだ?)」

俺の目の前の光景は、いつもの日常と変わらなかった。

初めから、テロリストが来なかったような日常だ。

『お、元に戻ったようじゃな』

また唐突に声が聞こえるひい爺さんの声。
いい加減に慣れてきたな。

「（おい、ひい爺さん。これはどうということだ？）」

教室で声を出すわけにはいかないので心の中で話す。

『見ての通りじゃ。時間を戻して、テロリストなど来ないようにした。元々、あのテロリストはワシが用意した人間たちじゃからな』

「つまり、どうということだ？」

『物分かりが悪いのう。簡単に言うんじゃ。学校にテロリストに来るといふ未来を抹消して、時間を戻した。それだけのことじゃ』

「（それだけのことって随分簡単に……待てよ……）」

『どうした？』

「（学校にテロリストが来るといふ未来を抹消したってことは、俺がテロリストを倒したという事実も……）」

『消えたじやろうな』

「うわあああああああ！俺の今までの苦勞は何だったんだあ
あああああ！」

『……………ドンマイ』

「おい、ゴラ！勝手に話を切るんじゃない……………ない……………」

いつの間にか声に出していたらしく、クラス全員が俺のを見ていた。

「那雲、本当にどうした？」

クラスを代表してなのか先生が聞いてきた。

「えっと……………頭壊れたんで、保健室行ってきます！！！」

教室を出た後、俺は屋上で、もう教室に帰れない！、とさめざめ泣いた。

第3話 テスト終了（後書き）

かなり話をすっ飛ばしてますね。
すいません。

でも、作者はさっさと《テスト》編を終わらせたいわけですよ。

なぜなら、早く《とある魔術の禁書目録》編を書きたいからですよ。
はい、先ばれ（？）もここまでです。

誤字脱字の指摘と感想をよろしくお願いします。

第4話 世界浄化師（前書き）

会話文ばかりかですみません。

第4話 世界浄化師

side 那雲勝羅

「そんで、あれは何の《テスト》だったんだ？」

《テスト》が終わり、家に帰ってきた俺は自分の部屋でニコとひい爺さんの3人で話していた。

最もひい爺さんは声だけで姿はないけど。

『うむ。この《テスト》は、ナグモの力を試すためにやったんじゃ』

「俺の力を試す？」

「ひいおじい様、それはどういうことですか？」

ニコには、既に俺が《テスト》を受けたことについては話してある。

『ニコよ。こんな噂を聞いたことがないか？』

「噂ですか？」

『“悪魔が各世界を支配し始めている”という噂じゃ』

おいおい、天使の次は悪魔かよ。

俺の日常が中二病で染まっっていく……………。

「あ、あれは、ただの噂で根拠のない作り話じゃないんですか？」

『残念ながら、事実じゃ。どこから漏れたのだろう。今では、天界中の噂になっておる』

「それと今回の《テスト》が何の関係があるんだ？」

話がズレそうなので、本題に戻した。

『そこで、我々は悪魔が各世界の支配を防ぐために、悪魔と戦うための組織「世界浄化師^{エクソシスト}」をつくることに決めたのじゃ。まあ、最もこの組織の存在は、天界の中でも極秘事項にされているがな』

話が飛び過ぎているが、もうそんなことは気にしない。

「そんじゃあ、あの《テスト》は俺を『世界浄化師』にするための適性試験だったことか？」

『お、今度は物分かりが早くて助かるのう。簡単に言えば、そういうことじゃ』

「おいおい、それでいいのかよ。こんな一介の男子高校生に世界の命運を預けるような真似をして」

「そうですね！ひいおじい様！それに、カツは人間なんですよ。人間には、魔法や能力や特殊体質なんてものがないのですよ。悪魔と戦ったりなんかしたら、死んじやいますよ！」

「能力ならあるぞ」

「え？」

ニコが呆ける顔をする。

俺は自身の能力である『マテリアルパズル素材構築』を見せるために、適当に机の上にあるシャープペンを『素材』と規定して手の上に1メートルほどの柄がない鉄の刀をつくり上げた。

それを見たニコが驚いた顔で、俺の顔を凝視してきた。

「何でカツが能力を持つてるの？」

「お前を助けてもらったお礼として、ひい爺さんに俺の能力を開花させてもらった。生物には、必ず能力が備わってんだろ？」

俺の言葉に、ニコは首を振った。

その後、ニコは上を見上げて、

「どづいつことですか、ひいおじい様？」

『……………』

ニコの質問に答えないひい爺さん。

ニコは、ハア〜とため息をつく。

「カツ、勘違いしているようだから言っておくけど、人間には初めから何の能力も備わってないよ」

「え？じゃあ、俺の能力は何？」

「たぶん、ひいおじい様が勝手に授けた能力だと思う」

「おい、ジジイ」

『……何じゃ？』

今度は返事があった。

「どづいつことか、説明してもらおうか」

『ワシは、ナグモの中にある能力を』

「嘘をつかないで下さい。人間に初めから能力はありません。ですが、今のカツには能力がある。つまり、ひいおじい様が能力を授けたことになります。『対価』を求めるために」

「『対価』ってあれか？これをやるから代わりにそれを寄越せのなのか？」

ある漫画では、相手の願いを必ず叶える代わりに、その『対価』として相手の1番大事なものをもらう、ようなものもある。

それと同じことなのだろうか？

「簡単に言ってしまうえばそういうこと。だから、カツも払わなければならぬ」

「な、何を払うんだ？」

これで、1番大事なものを寄越せ、なんて言われたらどうしようか。
明日から生きていけないかも。

『簡単なことじゃよ。ナグモが「世界浄化師」になって悪魔を倒してくれればいいのじゃ』

ひい爺さんが開き直ったように言った。
もうごまかすつもりはないみたいだな。

「断ったら、どうすんだ？」

「断った場合は『対価』として、ナグモが死んだ後の魂をもらおうとするかの」

どこかの悪魔みたいなことを言うひい爺さんだな。本当に天使か？

まあ、つまりはこういうことだろう。

ひい爺さんは、俺に能力を与えることの『対価』として『世界浄化師』になって悪魔を倒すこと。もし、断った場合は死後の俺の魂をもらうこと。

はっきり言って脅しだな。

「わかったよ。やってやるぞ」

「カツ！」

ニコが声を上げる。

俺はニコの頭に手を乗せて撫でながら言った。

「大丈夫さ。俺にはひい爺さんからもらった能力がある。これがあれば、誰にも負けやしないさ」

「死ぬかもしれないんだよ？」

「…………それは嫌だな。でも、どっちにしたって『対価』を払わなければならぬんだろ。だったら、やるしかない」

「それは、そうかもしれないけど……………なら、私もやる」

「何を言ってるんだ！ニコまで命を危険にさらせる必要はないんだぞ」

「私もやった方がカツが死ぬ確率が減る。ひいおじい様、いいですよね？」

『別に構わんぞ。元からワシもニコとナグモを組ませるつもりじゃったからの』

ひい爺さんの答えに、ニコが笑顔を浮かべた。

『さて、ナグモの「世界浄化師」になることは決まったな。では、本題に入るとしよう』

話題を切り替えるようにひい爺さんが言った。

『本来の「世界浄化師」は、天使とそのパートナーが1つの身体に共有して、悪魔と闘うのが普通じゃ』

「どづいう意味なんだ？」

『言ってしまったえば、2つの魂で1人ということじゃな。その世界でもあるじゃろ？』

「……………まあ、あるわな（アニメや漫画の世界で）。つまり、天使はそのパートナーに憑依するってことか。でも、それは意味あるのか。2つの魂を1つの身体に共有するより、2人で1組の方がいいんじゃないのか？」

『昨日言ったじゃろ。天使がそのまま下界に降りてしまうと、力が大きすぎて「世界の崩壊」が始まってしまつと。だから、天使はパートナーの身体を借りて悪魔と闘うのじゃ』

「しかし、私たちはどうなのですか？私はこうやって身体はありませんから、カツの身体に憑依することなど無理ですよ」

俺はニコの言葉に想像してしまった。

ニコの声が自分自身の中から聞こえてくる……………嫌だな。プライバシーの侵害にもほどがある。

『君たちは異例じゃ。さつきナグモが言った通り2人1組で悪魔と闘ってもらうのじゃが、それではどうしても戦力不足になってしま
『う』

「どづしてだ？他より1人分は戦力があると思うけど」

『逆じゃ逆。天使がパートナーに憑依するのはもう1つ理由がある。それは、パートナーの戦闘能力の増幅じゃ。天使が憑依したパート

ナーをサポートすることで、身体能力の向上と魔法の使用可能という2つのリミットが存在する』

「じゃあ、俺たちは2人1組で、そのリミットが存在しないから、他の組より戦闘力が乏しいっていうわけか？」

『そういうことじゃ。さらに、戦闘力不足の原因がもう1つある』

「……ッ！」

ニコの肩がピクツと動いた。

『ニコは、昔に左翼を失くしてな。魔法ができないんじゃない。だから、力不足が否めないんじゃない』

「何で左翼がないと、魔法ができないのか知らないけど聞かないでおくよ。また説明されてもあれだから、そういうものだと思うんだよ」

というわけで、ひい爺さんが、特別に戦闘力不足な俺たちにサービスをしてくれた。

俺には人間離れの身体能力。

訓練すれば、それなりに強くなるとのこと。

ニコには金色に光る剣だった。

これはニコが天界で使っていたものらしく、ニコはその剣を持ったときに懐かしそうに胸に抱いていた。相当な愛着があるみたいだな。

ちなみに、これについては『世界浄化師』の支給らしく、『対価』は
いらなかった。

「この剣に、鞘はないのか？」

ニコの持っている剣は抜き身で鞘はない。

「ないよ。強いて言えば、鞘は“私”かな？」

そう言ったニコは、いきなり剣の先を自分手の平に刺した。すると、
剣はニコの手の中にみるみると吸い込まれていった。そして、剣は
完全にニコの手の中に吸い込まれてしまった。

「ね？」

と腕を広げて、こっちを見る。

「鞘は自分ってそういうことか」

その後、ひい爺さんは修業場として異空間を用意してくれた。
この異空間は、とてつもなく広く広くニコと修業しろとのことだ
った。出入り口は俺が使っていない戸棚の引き出しだった。
外で修業するよりはいい。もし、外で修業して人に見つかりでもし
たら、大変だからな。

そして、ひい爺さんは、

「必要なものは全部揃えてやった。あとは、頑張るのじゃぞ」

と言って、消えてしまった。

これが、俺とニコの出会い。
そして、これからが運命の始まり。

第4話 世界浄化師（後書き）

異空間は、DBの『精神と時の部屋』みたいなのだと思って下さい。

誤字脱字の指摘と感想をよろしくお願いします。

次は人物設定です。

登場人物・用語解説（前書き）

なぜ『世界浄化師』でエクソシストと読むなんか聞かないで下さい。

作者が単に中二病なだけなんですから。

登場人物・用語解説

《登場人物》

No.1

・名前
那雲勝羅なぐもかつら

・学校

市立伏獅成中央高校2年D組

・容姿

身長174cm / 体重69kg

黒髪（髪の毛の長さは襟に少しかかるくらい、つまり主人公っぽい髪型）
中肉中背（スタミナや筋肉増強など色々と日頃からトレーニングしている）

・特徴

無茶なことをしがちで、喧嘩っ早い。

ニコの曾祖父からもらった高い身体能力で、動体視力が他人より異常に高い。

異空間で、ニコに稽古をつけてもらい、多人数相手でも余裕で勝てるほどの剣術を会得。

『エクソシスト世界浄化師』になってからは、護身用にいつも短い木刀を腰に差している。

好きなラノベは《とある魔術の禁書目録》。

運動神経は抜群だが、学力は最低ランク。

・能力
マテリアルパズル
素材構築

『世界浄化師』になるときにニコの曾祖父から与えられた能力。半径1メートル内の物質などを素材と規定し、分解・増殖・構築で別の物体などをつくることができる。

素材にする物質の質量は関係なく、基本的に原子と分子があればOK。

さらに、不確定要素の多い物質でも可能。

例えば、

小石 刀・剣（鉄原子）

空気（気体） 空気の壁（固体）（酸素・窒素など）

物体の構築時に素材は消費するが、『リセット』をすれば物体から素材までの逆再生みたいなことができる。

例えば、

刀・剣 小石

空気の壁（固体） 空気（気体）

他人の能力も構築ができる。素材にはそのオリジナルの遺伝子が必要不可欠。

例えば、

一方通行の髪の毛（遺伝子） ベクトル操作（能力）

ただし、能力を手にしてもオリジナルを超えることはできず、劣化コピーに過ぎない。能力使用時は、脳や身体の負担が大きすぎて素材構築を使うことはできない。

名前の由来は、

素材 マテリアル（英語）

構築 パズルにしたのは、素材構築が似たようなピースから1枚の絵を完成させるパズルのように似ているため。

間違っても、これと同じタイトルの某漫画とは全く関係ない（作者はこの漫画が大好きです）。

・紹介

突然、部屋に現れたニコの巻き添えで神様から『世界浄化師』に任命され、各世界で悪魔と戦うことになる。

No.2

・名前

ニコ∥レント∥システイーナ∥サラ∥ハマア∥クリューク∥ナ∥カルア∥ロン∥サウコース

・学校

天界学院中等部2年（元）
伏獅成中央高校2年D組

・容姿

身長145cm、体重？kg
長い金髪（普段は後ろを1つに縛っている）
顔はかなり可愛い（けんぷファーの世界で四大美女に挙げられる）
無駄な肉がなく胸は残念

・特徴

体術や剣術など近接格闘系ならなんでもいける（天界学院では1、2を争う実力者）。
すごい頭が良い（天界学院中等部で1、2位）。
少し天然でたまにドジることもある。
勝羅にだけはタメ口で、他の人には敬語。
困っている人・苦しんでいる人がいれば必ず手を差し延べる。
翼が片方しかないため、魔力を練ることができても、操ることがで

きず暴発してしまう（小さい頃に『ある事件』で失くした）。
人間の常識に乏しく、たまに大変なことをして勝羅を困らせる〓
トラブルメーカー。

人間界では、地雲に落ちたときにできた『圧力』を抑えられる身体で暮らす。

紹介

天界で赤ちゃんを助けようとして『アンダークラウド地雲』に落ちた。目が覚めたときに勝羅の部屋にいた。それから、曾祖父に『世界浄化師』に任命され各世界で悪魔と戦うことになった。

No.3

・名前

那雲沙菜なぐもさな

・学校

市立伏獅成中央高校1年K組委員長

・容姿

身長150cm、体重45kg

少し茶色が入っている髪

リボンでポニーテールにしている

すらつとした体型

日頃から食生活に気をつけている

胸はニコ同様に残念（自分が言うには、ニコ以上にはあるとのこと）

・特徴

勝羅の妹。

勝羅のことは兄さんと呼び、口調は基本敬語（たまに暴走もあり）。学力は高く、運動神経は平均並み。

食生活に気をつけているせいか、料理がめちゃくちや上手い（家事もやる）

月島奈緒とは表面上は仲が良い（でも、色んな意味で対抗心を燃やしている）。

最近の悩みは、勝羅とニコが部屋で何をしているのか気になっている。

あえて言うならば《天神乱漫》の佐菜。

NO・4

月島奈緒
つきしまなほ

・学校

市立伏獅成中央高校2年D組

・容姿

長い茶髪（言うならば《緋弾のアリア》の白雪みたいな髪型）
スタイル抜群でモデル体型

・特徴

勝羅の幼なじみ。

勝羅のことが好き（猛アピールしているが、勝羅の鈍感でいつも空振り）。

料理が絶望的な下手さ（一般人が食べたら失神する。おかげでいつも毒味させられている勝羅はある程度の耐性ができている）。時々、沙菜と対立（主に勝羅絡みで）。

《用語解説》

・世界浄化師

エクソシスト

天使と他世界の生物が2人1組になり、各世界を支配しようとする悪魔を倒す役職。

天使は、天界以外の世界にそのまま出現しようとする、その存在自体が世界全体に『圧迫』をかけて『世界の崩壊』を招いてしまうために、他世界にいる生物の身体を借り悪魔と戦う。

この法則は悪魔も同じで、その世界の生物に憑依して世界を支配しようとする。

『世界の崩壊』は天使や悪魔の出現30分くらいで始まる。ただし、ニコは地雲から落ちたときに圧力を抑える身体ができたために、わざわざ勝羅の身体を借りる必要がないし『世界の崩壊』も起こらない。

『世界浄化師』の存在は天界の最高機密で、現在は10組の天使とパートナーがいる。

登場人物・用語解説（後書き）

ここまで書いてきたけど評価0pt。

泣いてませんよ！

これは、あれです！

目にゴミが入っちゃったってやつです！
本当ですよ！

……コホンツ、少し取り乱しました。

では、次回の予告。

『世界浄化師』になった勝羅たちに、初めての仕事。その仕事場は
《とある魔術の禁書目録》の世界だった。

第1話 初めての異世界（前書き）

さて、ようやく《とある魔術の禁書目録》編に入りました。

時系列はあまり気にしないで下さい。

強いて言えば『ブリテン・ザ・ハロウィン』と『第三次世界大戦』の間でしょうか。

有り得ませんね。

上条はイギリスからそのままロシアに行きましたし。インデックスは、フィアンマのせいで『自動書記』ヨハネのペンを発動中ですし。だから、気にしないで下さい。

あと《とある魔術の禁書目録》の用語はバンバン使うつもりです。人名も同じく。

ここからは、三人称で書いていきますのでよろしくお願いします。

では、どしどし。

第1話 初めての異世界

とある学校の学生寮の一室

午前8時30分。

「うぎゃー！不幸だあー！」

「とうま、とうま。大丈夫？」

部屋で叫んでいるのは、この世界の主人公の上条当麻^{かみじょうとうま}。そして、上条のことを心配しているのがインデックス。本当はもっと長い名前なのだが、ここでは省略させてもらおう。

この世界の主人公である上条当麻が、なぜ朝っぱらから叫んでいるのかと言うと、

（今日は大事な定期テストの日。しかし、まさかの目覚まし時計の電池が切れるという不幸なことが起こり、現在の時間は8時30分と遅刻が確定しそうな……いや、一刻も早く学校に行くべし！）

そう思い立った上条は、超高速で制服を着用し、薄っぺらいカバンを手にして、玄関に走り込みドアを開けた。

「とうま、急いで学校に行くのはいいけど、朝から既にお腹を空かせているシスターさんはどうしたらいいのかな？」

インデックスの声は、外を走り抜ける上条には聞こえるはずもなかった。

ただ、このとき確定したのは、テストという薄っぺらい紙に散々に打ちのめされた上条が帰ってきたときに、暴飲暴食シスターさんに頭をかじられることだった。

とある学校の学生寮

第1話 初めての異世界（後書き）

途中で、インデックスと『禁書目録』を使い分けるようにしましたので補足説明をさせて頂きます。

インデックスという言葉は、1人の少女を意味しています。これには、10万3000冊の原典を保有する『魔道図書館』の意味を表しておりません。

反対に『禁書目録』という言葉には『魔道図書館』も含めたイギリス清教のシスターという意味で使っております。

もしかしたら、今後もこのような使い方をしたことがあるかもしれませんが、その場で補足説明を致しますのでお願い致します。

話は変わりました、オリジナルストーリーの予定です。

誤字脱字の指摘と感想をよろしく願います。

第2話 窓のないビル（前書き）

かなり微妙です……………（^^；

第2話 窓のないビル

とある学校の学生寮

「うまい！うまいよ！どの料理も全部うまいよ！」

暴飲暴食のシスターが丸机に乗っている数々の料理を平らげていた。

「すごい食欲……………」

「胃袋は底無しなのかな……………」

インデックスが食べている姿に、勝羅とニコが思わず感想を零す。

丸机に並んでいる料理は、上条に朝ごはん抜きにされたインデックスに、ニコが冷蔵庫にあった食材を適当に取り出してつくったものだ。

とやっていたのだが、インデックスの食欲が予想以上に大きく、既
に上条宅の冷蔵庫は空である。

だから、今、インデックスが食べている料理が最後だったりする。

ちなみに、それぞれ自己紹介は済んでいて、インデックスの警戒心は解かれている。

「意外だな」

「何が？」

呟いた勝羅にニコが反応する。

「ニコが料理できることだよ。家に居たときは、そんなスキルを發揮しなかっただろ」

「家にいたときは、あなたのお母様が料理してたからね。私が仕事を奪うわけにはいかないし。やっても、手伝いくらいだったよ」

「そうなのか」

そんな会話をしていたら、インデックスが高らかに皿をかがげて、

「おかわり!」

と宣言した。

彼女には、食に対して遠慮がないのだろうか。

「もっと食べたいのは分かるけど、もう食材がないの。だから、諦めて」

ニコが優しく簡潔に言った。

「ええ〜もっとニコの料理の料理が食べたい」

駄々をこねるインデックスに、勝羅は息を吐くと、

「仕方ないな。部屋に行つて、何かないか探してみるか」

「あ、私も行く」

そう言って、勝羅とニコは出て行った。

とある学校の学生寮の外

「ちょっと待って、カツ」

「何だ？」

勝羅とニコは自分たちの部屋の前にいたが、ニコが急にカツを呼び止めたのだ。

ニコはカツの問いに答えず、学生寮と反対側の方向に歩き出した。数メートル歩いたところで立ち止まり、足元の小石を拾った。

小石を拾っている間も、ニコの視線は斜め上を向いている。

勝羅にはニコが何をするのかわからなかった。

すると、

「えいつ！」

ニコは掛け声とともに小石を投げた。斜め上を向いていた視線の先に。

投げられた小石は、ニコの筋力により普通の人間が視認できない速度で飛ぶ。

その時、飛んで行く小石にチリッと火花が走った。その火花の大き

さは、やはりとても小さなものだった。

「何をしたんだ？」

勝羅がニコの意味不明の行動に疑問の声をあげる。

「小さな虫みたいなのがいたから、小石を投げてやっつけてみた」

「天使は、無殺生じゃないのか？」

「違う違う。虫と言っても、虫じゃないから。虫みたいな小さな物ってこと。何か監視しているような感じがしたんだ」

「虫みたいな小さな物で、監視していた？何かの勘違いじゃないのか？」

「そんなことないもん。私たちが部屋を出てから朝からずっと同じ場所にいたもん」

「空中に同じ場所にいた？少なくとも、俺には見えなかったぞ」

勝羅は、身体能力の強化で視力の強化がされている。普通の人の数十倍は良く見える。その視力を持ってしても、見えないということ。はただの勘違いか余程小さいのかどちらかだ。

「あの大きさは、カツには見えないかもね。だって、すごい小さいかったし」

「どうやら、後者のようだ。」

しかし、それが見えるニコの視力はどれだけなのか？

一方、勝羅はその正体について考えていた。原作を読んでいる勝羅には気になることだ。

(とても小さくて、空中に浮かんでる。しかも、虫ではなく物。さらに、監視をしている。そして、あの火花……………まさか!?)

1つの結論に至った勝羅はニコに聞いてみる。

「ニコ、そのやった物は、どのくらい大きさのものかわかるか?」

「うん、カツたちの単位で言うと、ナノメートルくらいかな」

この少女は、自分が天使にも関わらず人間が使っている単位まで熟知しているようだ。

「やっぱり……………」

ニコの答えに、自分の結論に間違いがないことを確信した勝羅。

「私がやっつけた物がわかったの?」

「察しがいいな。今のニコの答えで確信したよ。ニコがやっつけた

……………いや、壊したのは 『アンダーライン滞空回線』だ」

「うん? 『滞空回線』?」

「簡単に言っちゃえば、小型の監視カメラってところだな」

「もしかして、壊したのはマズい?」

ニコが罰が悪そうな顔をする。

「いや、大丈夫だろ。ただ、壊したのは謝らないといけないかもな」

「だったら、私が」

「ニコに行く必要はない。ここで、インデックスの相手でもしてくれ。謝りに行くのは俺だけでいいし」

ニコにアレイスターの相手ができるとも思えないしな、戦闘ではなく話術という意味で、と勝羅は考えていた。

「心配するなつて。1時間後くらいには帰ってくるよ」

そう言った勝羅は、窓のないビルを目指して第7学区を歩いて行った。

窓のないビル

第7学区の地形を全く知らない勝羅だが、運よく広い通りの先にある窓のないビルらしき建物が見えた。

広い通りを歩く人の姿が1人2人見られる。

学生ではない。店を経営する大人の姿だ。

学園都市にある数々の店の店員のほとんどは学生である。店員の学生たちを束ねている店長というのが大人たちだ。だから、1つの店

舗に、普通は1人2人はいる。多くても4〜5人くらい。中には、1人の大人が2つの店を管理している場合もある。

そんな話はさておき、目的の建物を見つけた勝羅は広い通りを歩いて行く。

そして、窓のないビルの前に着いた。

とりあえず、窓のないビルの周りを一周してみる。

「ホントに、ドアも窓もないんだな。これなら、誰も入れないわけだ」

窓のないビルに入るには、空間系移動能力者の『案内人』に連れてきてもらうしかない。『案内人』の役を結標淡希むすじめあわきがやっていたが、『残骸レムナント』の事件で既にその役は解かれている。学園都市に反旗を翻すような奴に、大事な役を任せるわけがないのだ。

（結標がいないところで、今は別の空間系移動能力者が入ってるだろうな。まあ、そんなことはさておき……………）

勝羅は両手に『窒素爆槍』をつくり上げ、

「ちょっと試してみたいことがあるんだよ！」

両手につくった『窒素爆槍』を窓のないビル目掛けて投げた。もちろん、周りに被害が及ばないように上の方を狙って。

ゴバアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！

壁に叩きつけられた『窒素爆槍』が爆発する。

勝羅はさらなる追撃として新たな『窒素爆槍』をつくり上げた。

それをまた投げる。

つくっては投げる。つくっては投げる。つくっては投げる………ずつとその繰り返しを続けた。

周りの建物にいる人が繰り返し返される轟音に驚いて次々と逃げ出しているにも関わらず。

そして、100発以上は投げたというところで攻撃は止んだ。

「あんだだけ投げたというのにめっちゃめっちゃタフじゃねえか」

あれだけの猛攻を受けた窓のないビルの壁には傷一つ付いていない。

当たり前であろう。

窓のないビルの壁は『0930』事件で一方通行に地球の自転のベクトル使ったビルの攻撃をもともしない史上最強の要塞。

100発以上の『窒素爆槍』と地球の自転のベクトルを使ったビルの攻撃、どちらが攻撃力が上など言うまでもない。

「この目でビルの強度が見れたからいつか。さて、ビルの中に入りますか」

勝羅が『窒素爆槍』を撃つたのは、ただ単に窓のないビルも強度を見てみたいだけの話。

最初から『窒素爆槍』で窓のないビルに穴を開けられるなどとは思ってはいない。

勝羅が窓のないビルの壁に手を添えると、直後に音もなく絶対防御を誇る窓のないビルの壁に大人1人が通れるくらいの穴ができた。

勝羅が『素材構築』でビルの壁を素材と規定し、分解と構築を行ったのだ。
素材にされたビルの壁は、勝羅の手の中に小さい球の形にされていた。

「よし、これで開いたな……………あゝこれは無理だな」

穴の中を覗き込んだ勝羅が呟く。

開けた穴から見ると、幾千のもコードやモーターみたいなものがビツシリと詰められていた。とてもじゃないが、勝羅が通れる隙間がない。猫の1匹でさえこの中を潜るのは難しいのではないだろうか。

（まあ『素材構築』でコードを分解していけば中に進めるけど、万が一アレイスターの生命維持装置のコードにうっかり分解したら大変なことになるな）

その時、ブーブーブーブーと勝羅のポケットの中にある常時マナーモードの携帯が振動した。

この世界に来るときに、何かに使えればいいと持ってきたのだ。勝羅の携帯は学園都市の『外』と同じ世代の携帯で、学園都市で流通している携帯とは違う。

いや、そんなことはどうでもいい。

それよりも、なぜ学園都市に来たばかりの勝羅の携帯に電話がかかってくるのだ。もちろん、電話番号など誰にも教えた覚えはない。

勝羅は振動する二つ折り携帯を取り出し液晶画面を開けた。

液晶画面には、非通知の文字が映し出されている。

ピツと通話ボタンを押して、携帯を耳に押し当てた。

「おはよう、アレイスター」

勝羅が電話の相手が口を開く前に口を開いた。

『……………わかつていたのか？』

「わかつていたもなにも、こうやって壁に穴を開ければ、アレイスターが何かしらの方法でコンタクトを取ると思っていたよ。まさか、俺の携帯に直接かけてくるとは思わなかったけどな」

『何が目的だ？』

「話が早くて助かる。とは言っても、こっちは連れが監視カメラを壊したことを謝りに来ただけなんだよ。できれば、電話越しじゃなくて、直接会いたいんだけど」

『断ったらどうするつもりだ？』

「断る？もし、断ったら……………このビルを蜂の巣にする」

『わかった』

アレイスターはそれだけ言って、電話が切った。

「最初から穴は元に戻すつもりだったしな。“リセット”」

勝羅は手の中にある、小さな球をビルの壁に“リセット”する。瞬時に穴は塞がり、元の壁に戻った。

「テレポ
ートそう言えば、空間移動なしにどっやってビルの中に入るんだ？」

第2話 窓のないビル（後書き）

誤字脱字の指摘と感想をよろしくお願いします。

今回は、アレイスターと対談です。

第3話 演算型・衝撃拡散性複合素材（前書き）

このタイトルを見て、一体どれだけの人が「ああ、アレか……」と言えるか。

ちなみに、作者は調べるまでこの単語は出てきませんでした。

第3話 演算型・衝撃拡散性複合素材

窓のないビル

「中はこうなってるんだな」

「珍しいのか？」

「少し感動しているだけだ」

勝羅は窓のないビルの中にいた。

どういう方法で窓のないビルに入ったかというところ『素材構築』で壁とコードを分解 ではなく結標の後に着任したと思われる空間系移動能力者の『案内人』に連れてこられたのだ。

そして、勝羅の目の前には、男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える『人間』、学園都市統括理事長アレイスター「クロウリーが弱アルカリ性の培養液が入った水槽に緑色の手術衣を着て逆さまになって浮かんでいた。

「とりあえず、詫びる。『滞空回線』を壊してすまなかった」

頭を下げる勝羅をアレイスターは眉一つ動かさず見ている。

「君は、なぜ『滞空回線』を知っている？」

『滞空回線』の存在は、学園都市の機密部類に入る。その存在を知っているのは、せいぜい一握りの『闇』の人間だけだ。

例外として、暗部の『グループ』や『スクール』くらいだろう。だから、学園都市の一介の高校生には、知らないはずのこと。

とは言っても、勝羅の場合は『原作』を読んでるからなのだが。

「たまたま噂で聞いたただだよ。まさか、本当にあるとは思わなかったけどな」

「……そうか」

アレイスターが短く返事した。

（ああ、ヤバイかも。これは、目をつけられたみたいだな………まあ、いつか。何かしてきたらやり返せばいいだけだし）

ここで、勝羅はある事を思いついた。

「アレイスター、頼みがあるんだけど」

「何だ？」

「1gでもいいから『演算型・衝撃拡散性複合素材（カリキュレイト＝フォートレス）』くれない？」

一方通行のあの地球の自転ベクトル攻撃すら耐えたビルの壁の素材とされている『演算型・衝撃拡散性複合素材』。

これがあれば、勝羅は絶対防御とも言える壁を手に入れることができる。

「こちらにメリットはあるのか？」

「ない」

勝羅はきっぱり言った。

「なら、ダメ」

「ダメなら、壁から持って行く」

「……1時間後に君の家に届かせるようにしよう」

「サンキュー」

内心でガッツポーズを取る勝羅。

勝羅が、さてと帰るか、と思ったときアレイスターが聞いてきた。

「君は、何者だ？」

「おいおい、かの世界最高の魔術師とも言われていたアレイスター
「クロウリーが何を聞いてんだ？」

「私の正体も知っているとほな。これは驚きだ」

「驚いてるように全く見えないな。……まあ『演算型・衝撃拡散性
複合素材』をもらえるんだし、答えてもいいか。アレイスターの味
方でも敵ではない」

そう言って、勝羅は姿を消した。

『案内人』に空間移動してもらったのだ。

広い空間の中にいるアレイスターは、珍しく笑いを零した。

「これは、いい『人間』が入ったものだ。まさか『幻想殺し』の寮の下にいたとは、私もまだ甘いものだ」

アレイスターが勝羅たちに気付かなかったのは、ニコの曾祖父が情報操作をしたせいなのだが、それに気付くことはない。

所詮はアレイスターも《とある魔術の禁書目録》の世界の住人ということだ。

「それに一緒にいるのは『天使』とはな。さて『プラン』の短縮に役立ってもらおうか……………」

とある学校の学生寮

勝羅が窓のないビルから帰ってみれば、

「ヤキソバ！ヤキソバ！」

全く遠慮というのを知らない銀髪シスターが、右手にフォーク、左手にスプーンを持って、丸机のところでウキウキと両手を上下に振っていた。

焼きそばをフォークとスプーンで食べるつもりだろうか？

「あ、カツ。お帰り。どうだった？」

ニコはキッチンのところで、焼きそばをつくっていた。

「大丈夫、大丈夫。問題なし」

「そう、よかった」

ニコが胸に手を当ててホッと息を吐く。

「そんなに心配するようなら、最初から壊さなきゃいいのに……」
その勝羅の呟きは、焼きそばをつくるジューという音に掻き消された。

その後、約1時間。

勝羅たちはインデックスと他愛もない話をして過ごした。
内容が、上条に対してインデックスの愚痴だが。

1時間後。ピンポーン。

「来た！」

この瞬間を待っていたかのように、勝羅はガバツと立ち上がり、ドアに向かった。

今、勝羅は自分の部屋に居る。

理由は単純で届け先がこの部屋だから。

勝羅はドアを開け、配達員の若い兄ちゃんから『演算型・衝撃拡散性複合素材』が入っていると思われる箱を受け取り、ボールペンでサインをした。

ドアを閉めると、箱を丸机の上に置きビリビリとガムテープを剥がす。

そして、入っていた。

発砲スチロールに埋もれていた特殊と思われるようなケースに。

米粒ほどの『演算型・衝撃拡散性複合素材』が。

「小ささあ！マジで1gの『演算型・衝撃拡散性複合素材』を送ってきやがった」

確かに、勝羅は『演算型・衝撃拡散性複合素材』を1gでもいいと言った。理由は、単純で『素材構築』で『演算型・衝撃拡散性複合素材』を増殖させればいいと考えていたからだ。

米粒ほどの『演算型・衝撃拡散性複合素材』をケースから取り出し、手の平に乗せてみる。

「大きさの割には意外と重さがあるな……………1gだけど」

本物の米粒は1gもない。

だが、この米粒ほどの大きさをした『演算型・衝撃拡散性複合素材』が1gあるのは単純に密度がとつともなく高いだからだろう。

「とりあえず、増殖させてみるか」

勝羅は『演算型・衝撃拡散性複合素材』を縦横1メートルの鉄板型

に増殖させた。

最初は、手頃な大きさというやつだ。

「このサイズだとさすがに重さがあるな……………」

米粒ほどの大きさを1gの『演算型・衝撃拡散性複合素材』を1平方メートルで約10キロほどある。

（問題は、これをどうやって常時携帯するかだな。ポケットに入れとくか…………ダメだ。戦いときに落として、能力範囲外に出たら終わりだし…………あ）

俺は適した形を思いつき、鉄板型『演算型・衝撃拡散性複合素材』を崩してその形にする。

「いいんじゃないかな？」

俺の右手首にリングが通っていた。

このリングは『演算型・衝撃拡散性複合素材』だ。大きさや太さは戦闘に邪魔にならないように調節してあるし、右手首にあることで、すぐに『演算型・衝撃拡散性複合素材』の壁を展開できる。

「でも、これってホントに『演算型・衝撃拡散性複合素材』なのか？」

勝羅に『演算型・衝撃拡散性複合素材』の本物かどうかは判断ができない。

アレイスターがメリットなしで送って来たものだから信憑性には欠ける。

「どれくらい耐久性があるか見てみるか。方法は……ニコに殴ってもらえればいつか」

デコピン1発で『窒素防壁』を破るニコの腕力がどれほどのものなのかは勝羅にはわからないが、1発のパンチで鉄筋コンクリートのビル1つは簡単に壊れるのではないかと失礼極まりない予想する。

「……………というわけだから、ちょっと力入れて殴ってみて」

「別にいいけど。壊れても知らないよ？」

「壊れたら、その時はその時さ」

勝羅とニコは学生寮の駐車場らしきところにいた。

インデックスの方はニコがつくった焼きそばをガツガツ食べている最中である。

件の『演算型・衝撃拡散性複合素材』は約2メートルの壁となって地面に突き刺さっている。

「それじゃあ、行くよ」

『演算型・衝撃拡散性複合素材』の前に立ったニコが小さく振りかぶり拳をぶつけた。

パアアンツ！と辺りに乾いた音が鳴り響く。

「驚いた……………」

「だろ？これで耐久テストは合格だな」

『演算型・衝撃拡散性複合素材』は突き刺さった位置から1ミリも動かず、微動だにしないでニコのパンチを難無く受け止めた。

こうして、本当に勝羅は絶対防御とも言える素材を手に入れたのだ。
った。

第3話 演算型・衝撃拡散性複合素材（後書き）

『演算型・衝撃拡散性複合素材』については、色々な説があると思いますが、作者が勝手に都合のいいように解釈しました。ご了承下さい。

それにしても、窓のないビルってどうなってるんでしょうね？

結標淡希曰わく「窓のないビルなどではないらしい」ですし。

核兵器ぶつけて、爆発は『演算型・衝撃拡散性複合素材』で防ぐとして、放射能とかはどうなんでしょうか？

……通りそうにありませんね。

では、あのビルの外壁には『演算型・衝撃拡散性複合素材』以外の素材が使われていることになります。

窓のないビルの魔術的防御説は、作者は「無し」という考えです。理由は、ヒューズリカザキリです。『界』全体の圧迫との魔力の循環不全を引き起こしますから、万が一ヒューズリカザキリの出現（現出？）で魔術的防御が機能しなくなる可能性が無きしにも非ずだからだからです。霊装とかなら別ですが。

『演算型・衝撃拡散性複合素材』も謎ですね。素材自体が衝撃の威力や向きを演算を行い、他方に衝撃を拡散させる、とかでしょうか。名前からしてそんな感じですか。もしかしたら、一方通行の演算パターンを応用しているのかもしれないですね。

誤字脱字の指摘と感想をよろしくお願いします。

今回は、《とある魔術の禁書目録》の世界で主人公の初の戦闘です。

第4話 VS 学園都市第1位（前書き）

戦闘シーンをワクワクしながら書いている作者です。

第4話 VS 学園都市第1位

第7学区

『演算型・衝撃拡散性複合素材』の耐久性を知った勝羅は部屋に戻らず、また第7学区を放浪し始めた。

勝羅には捜し人がいる。

だが、どこにいるかはわからない。

第7学区のコンビニで缶コーヒーでも買っているだろうと勝手な推測をしている。

捜し始めて20分後、見つけた。

缶コーヒーが入っていると思われるコンビニの袋を片手に、カツンカツンと現代的な杖をついている一方通行を。アクセラレータ

捜し始めて20分で見つかるのはかなり確率低いが、エンカウントしたのだから仕方ない。

勝羅は背を向けて歩く一方通行を尾行することにした。理由は単純で一方通行が居候している黄泉川愛穂のマンションを突き止め、打ち止めに会ってみたいだからだった。

(イギリス清教の女子寮にも行ってみたいな……………)

そんな思いを馳せる勝羅だが、他人である自分を入れてもらえるわけがなく、マンションや女子寮の入口で門前払いを喰らうことを忘れてはいけない。

そんな時、勝羅の尾行のターゲットの一方通行が不意に路地裏に入ってしまった。

(マンションに帰るのに、路地裏に入るのか)

勝羅は一方通行が曲がったところで、壁に背を這わせながら、顔だけを路地裏に出してみると。

「俺に何か用か？」

その言葉とともに、コツンと額に突き付けられる黒い物体。

「あ、あれ……？」

イマイチ状況把握ができていない勝羅が間抜けな声を出す。

「もう1度聞く。俺に何か用か？」

「……ああ、なるほど。これはヤバイ状況だな」

やっと状況を把握した勝羅が壁から身体を離し、一方通行の前に出る。

一方通行はその間も銃口を額から外さない。

視線をずらしてみると、道の隅にポリ袋が置いてあった。

「いつから、尾行しているとわかった？」

「質問をしているのはこっちだ。さっさと答えろ。それとも、このまま頭に風穴を穿けるか？」

額に突き付けた銃で脅す一方通行だが、勝羅の『窒素防壁』で頭に風穴を穿けられるわけがない。

「それは嫌だな。まだ死にたくないし」

「だったら、答えろ」

「そうだな。一方通行に　　お願いをしにねッ！」

台詞の途中で勝羅が一方通行の腕を蹴り上げようとする。咄嗟の勝羅の反撃に、一方通行は銃の引き金を引こうとするが、引かれる前に勝羅の足が一方通行の腕を蹴り上げた。蹴り上げられた拍子に、一方通行が持っていた銃も高く空中に舞い上がった。

一方通行が距離を取るために後ろに跳び、左手でチョーカー型電極のスイッチを入れる。

持っていた現代的な杖はコンビニの袋があるところに放り投げた。

一方、勝羅は一方通行の腕蹴り上げてからその場を動いていない。

「能力使用モードか」

銃を突き付けた時点で能力使用モードじゃなかったのか、と言われ

るとそうではない。勝羅は一方通行を見たときに、チョーカー型電極のランプが通常モードの赤色になっているのを確認している。もし、能力使用モードの緑色のランプだったら、別の方法で切り抜けるだけ。

最も、チョーカー型電極のバッテリーをできるだけ節約したい一方通行が下手くそな尾行者相手に最初から能力使用モードを使わない。

「コイツのことを知ってるみたいだな」

一方通行がチョーカー型電極を指先でトントン叩きながら言った。

「まあね。ちなみに、それをつくったのが『冥土帰し（ヘヴンキヤンセラー）』だってのも知ってるよ」

「あの医者のことまで知ってるのか」

「さて、おしゃべりはここまで。俺のお願いを聞いてもらえないか？」

「そのお願いとやらによるな」

「それはどうも。お願いというのが、髪の毛一本くれない？」

「髪の毛だと？」

一方通行はそのお願いとやらに驚く。

「オマエは『外』の回し者か？それとも、俺のクローンでもつくろうとする馬鹿な科学者の刺客か？」

学園都市の能力者の遺伝子は常に『外』の研究機関に狙われている。大覇星祭などがいい例だろう。

「怖いこと言うなよ。一方通行のクローンなんて怖すぎ。クローンは美琴だけで充分だ。あと『外』の回し者でもないから。髪の毛が欲しいのは、俺の能力の糧になって欲しいからさ」

「信じられねエな。やはり、そのお願いとやらは、聞き入れられねエな」

「やっぱり？じゃあ 力づくか」

「面白エ。来いよ」

その言葉が合図になったのか、勝羅が一方通行に向かって、人間の限界以上の速度で走り出す。

一方通行は勝羅が予想以上のスピードで来たのに驚いたが、すぐに腰を落とし両足のベクトルを操り、勝羅に突撃した。

一方通行が勝羅の顔に向かって手を突き出す。この手に捕まれば顔全体にベクトル攻撃を喰らわされるが、勝羅はその手を身体をくると捻って避ける。そのまま遠心力を足に乗せて、がら空きになっている一方通行の腹に蹴りを入れた。

もちろん『反射』を設定している一方通行に遠心力を乗せたただの蹴りなんて通じるわけではない。

勝羅の足が一方通行の腹に当たった瞬間『反射』が発動し、勝羅の蹴りが弾かれる。勝羅の身体は『反射』された足に引っ張られて、路地裏を抜けて路地に向かってもの凄いスピードで出て行った。

「ああ？」

自分が優勢にも関わらず、今の現象に一方通行は首を傾げた。

パンチや蹴りのような近接攻撃は一方通行の『反射』で全て防がれ、尚且つ攻撃した腕や足の骨は必ず折れる。これは『反射』したベクトル攻撃を受けた骨が他方向に受け流すこともできない力に耐え切れないため。

だから、今まで一方通行に無謀に立ち向かってきた無能力者（レベル0）は容赦なく手首や足首を折ってきた。

それが今『反射』した足は折れることもなかった。つまり、あの足は一方通行の『反射』を耐えたということになる。

耐えたからこそ、路地まで吹き飛ばされたのだ。

だから『反射』を耐えたことに、一方通行は1つの結論に達する。

「ハードテレーピング 駒場と同じ発条包帯。それも、耐久度がある高性能なやつか」

発条包帯の効果は、端的に言ってしまうえば身体能力の向上。リスクがあるが、そこを我慢してしまえば強力な武器となる。

「駒場とか懐かしいね。スキルアウト 最初は無能力者集団のリーダーとかであまり気に入らなかったけど、『あの事』で一気に気に入ったな。駒場のサンタ姿とか見てみたかったよ。確か、一方通行が殺したんだよね。全く酷いことをする」

そんな一方通行の呟きに道路のフェンスにぶつかった勝羅が答えた。

「テメエ、どこまで知ってやがる？」

「少なくとも、一方通行よりは知っている。あと、俺は発条包帯なんてやってないからね。こんな貧相な身体では発条包帯のリスクに耐えられない。『反射』を防げたのは、俺の能力のおかげさ」

一方通行の『反射』を防げたのは、勝羅の高い身体能力と『窒素防壁』のおかげだったりする。今の『反射』で『窒素防壁』の一部が破壊されたが、即座に『素材構築』で再構築して修復させた。

「俺の『反射』を受けてもピンピンするんで便利な能力だ。だが、そんな守りの能力では俺には勝てないぞ」

「そんなことないさ」

勝羅が台詞が終わると同時に前に右手に『窒素爆槍』をつくり出し自分と一方通行の中間地点辺りに投げた。

投げられた『窒素爆槍』は地面に着弾すると、周りに粉塵を巻き上げる。

「目眩ましのつもりか」

粉塵を巻き上げた勝羅は後ろの道路のフェンスを乗り越えて道路に出て、向こう側に渡ろうとする。車は来ていない。

後ろからガンツ！と鉄がひしゃげるような音がした。

後ろを振り向くと、さっき乗り越えたフェンスが砂塵を切り裂きながらこっちにももの凄い速度で飛んできた。

勝羅は咄嗟に手を飛んでくるフェンスの前に翳して、フェンスを『素材構築』で分解・構築をしようとする。

手を翳したのは、単純に『素材構築』の効果範囲を広げるため。そして、飛んでくるフェンスが勝羅の『素材構築』の分解・構築で半径が1ミリにも満たない球に変えられ、勝羅の手中に収まる。

また、勝羅の耳に風を切る音が聞こえてきた。

勝羅は、反射的に手首に通っているリングの一部分を分解・増殖・構築で『演算型・衝撃拡散性複合素材』を展開させる。

直後、上空から降ってきた一方通行の蹴りが『演算型・衝撃拡散性複合素材』にぶつかった。だが、クレーターを簡単につくるような衝撃は瞬時に拡散され、勝羅に衝撃が届くことはなかった。

一方通行の表情が驚愕の色で染まる。

まさか、自分の蹴りが止められるとは思っていなかったからだ。

一方通行が上空から降ってきたのは、砂煙から逃れた勝羅を見つけるために、砂煙より高い位置から捜そうとしたからだ。

一瞬だが動きが止まった一方通行の隙をを勝羅が見逃すはずもなく攻撃を仕掛けた。

周りの砂鉄を使い、『演算型・衝撃拡散性複合素材』の上に鉄の棘を大量につくり出した。一方通行の眼を目掛けて。ガガガガンツ！と眼を狙った鉄の棘は『反射』で折れてしまう。

今の状況は、勝羅が展開した『演算型・衝撃拡散性複合素材』の上に一方通行がいる格好で、その下から勝羅が『演算型・衝撃拡散性複合素材』が落ちないように下から両腕で支えている。

「リセット」

勝羅は一方通行の視界が鉄の棘の破片である程度埋めつくされている間に、展開されている『演算型・衝撃拡散性複合素材』をリングに戻した。

それにより、一方通行の身体が重力により落ちる。

勝羅は一方通行が浮遊感を感じている間に、自身の身体を横にずらして一方通行の横っ腹に蹴りを入れた。また『反射』が発動して、勝羅の身体が吹っ飛ぶ。吹っ飛ばされた勝羅は空中で体勢を立て直して上手く地面に着地した。

一方通行が地面に着地している時には、勝羅は一方通行から遙か離れた位置にいた。

(アイツ、俺の『反射』を利用しやがったのか……………!?)

勝羅がいくら『反射』に耐えられると言っても、一方通行の近距離戦闘では不利となる。だから、勝羅は近くまで来た一方通行から距離を取るために、一方通行の横っ腹に攻撃することで『反射』を利用して、自分の身体を吹っ飛ばさせて距離を取ることができる。自分の足で距離を取らなかつたのは、単純に『反射』と『瞬発力』の初速が違うからだ。

さて、勝羅と一方通行は互いに距離が離れている状況にいる。

「一方通行。お前は弱いぞ」

「ッ!?!?」

勝羅の言葉に一方通行が眼を見開いた。

第4話 VS 学園都市第1位（後書き）

そう言えば『原子崩し』を窓のないビルにぶつけたら、どうなるのでしょうか？

『原子崩し』の概念は『攻撃力』ではなく『溶かす』ですからね。窓のないビルの壁が溶ける？

『原子崩し』>窓のないビル？

作者としては、窓のないビルだったら溶けた場所から再生していくような常識外れなことをやるような気がします。

さて、ここで問題を出したいと思いますます。

第1問、『原子崩し』でも溶けない物はな〜んだ？

引っかけ問題などではありません。真面目な問題です。

解答は次の更新で！

誤字脱字の指摘と感想をよろしく願います。

今回は、一方通行と決着です。

第5話 力と技（前書き）

解答です。

正解は『上条の右手』と『未元物質』です。

上条の右手には、幻想殺しがありますから原子崩しは効きません。未元物質は、独自の物理法則を有しているため、既存の物理法則で溶かす原子崩しは効きません。

解説は以上です。何か不明な点があれば、できるだけ答えようと思います。

さて、今回のです。

何でこうなったんだが、作者でも謎です。

第5話 力と技

第7学区

「一方通行。お前は弱いぞ」

「ッ!?!?」

勝羅の言葉に一方通行が眼を見開いた。

「お前は自分の能力に頼り過ぎている。今の状態では『技』を持たない子供が単純に『力』を振り回しているに過ぎない。そんなことでは、打ち止め（ラストオーダー）も守られないぞ」

「テメエに、何がわかる……………」

一方通行が声に怒気を含ませて言った。

「俺の場合は『わかる』というより『知っている』だが……………。一方通行に聞く。『0930』事件で木原数多から打ち止めを助けられなかったのは誰だ？木原にバカスカと殴られたのは誰だ？」

「黙れ……………」

「お前だろ。あの時に、自分の無力さがわかったんじゃないのか。だから、打ち止めを守るために暗部に……………」

「黙れつつてんだろオオッ!?!」

一方通行が足のベクトルを操り、勝羅に突っ込んできた。
2人の距離は一気に縮まり、一方通行の手が勝羅の首を狙う。

しかし、あと少しというところで一方通行の視界から勝羅の姿が消えた。

次の瞬間、一方通行の腹に勝羅の蹴りが入った。

勝羅の足が一方通行の腹にめり込む。

「がはア……ッ!？」

一方通行の身体が吹き飛んだ。
地面と何度かバウンドを繰り返しながらごろごろ転がり、先程立っていた位置より後ろの位置で止まる。

「テ、テメエ、木原と同じことを……!!」

咳込みながらも手を地面に立てて起き上がろうとする一方通行。

「よくわかったな。今のは木原数多がやった対一方通行の戦い方だ」
勝羅が当たり前のように言う。

『0930』事件のときに、木原数多が一方通行に使った戦法（通称、木原神拳）は、拳を当たる寸前で止めて引くことで『反射』を逆に利用し、一方通行の身体にダメージを入れることができる。
今まで、勝羅が『反射』されるのをわかっていて蹴りを入れていた

のは、木原神拳をやるうとしていたから。
ちなみに、今成功したのは全くの偶然である。
そして、普通は一方通行がこんなに吹き飛ばすことはないのだが、
こは勝羅の身体能力の高さがものを言っている。

もう木原神拳は使える。タイミングを掴んだ勝羅が失敗することは
ない。

「驚いてるのか？木原と同じことをやったのが」

そんな勝羅の問いに一方通行は答えず、腹を押さえながら立ち上がった。

腹を押さえているのは、蹴られた場所の骨が折れているのだろう。

少し強かったかな、と勝羅は気楽に考える。

「どうする？まだ戦うかい？それとも、素直に髪の毛を渡す？」

「……………」

一方通行は答えない。

ただ、勝羅のことを真っ直ぐ見ているだけ。

「だんまりか。じゃあ、倒すまでだ」

ダンツ！と勝羅が地面を蹴った。

先程の突撃より速い速度で一方通行に突撃だ。数瞬とも言える時間
の間に一方通行に近づく。

勢いを落とすことのない勝羅の蹴りが一方通行を襲う。

その時、一方通行の手が動いた。

「よく考えたな」

その行動に勝羅は少なからず驚いた。

勝羅の蹴りに『反射』が効かないのなら、それを掴んでしまえばいい。一方通行の手に掴まれてしまったては、木原神拳もへったくれもない。

「だが、残念。明かされた種は効かない」

一方通行の手に当たる寸前で勝羅の足が止まり、代わりに勝羅の拳が一方通行の頭に目掛けて振り下ろした。

ガンツ！と一方通行の身体が地面にひびを入れながら叩き付けられた。

「ぐふウ……ッ!？」

脳を揺さ振られる感覚が一方通行を襲う。
全身から力が抜けるのがわかった。

「終わりか？一方通行？」

勝羅が一方通行を見下ろす。

対して、見下ろされている一方通行は動けなかった。

すぐにでもこの野郎を叩き潰したい、と思っても、肝心の身体が全く動かない。動いても、右腕の1本か。

「ん？」

突然、倒れた一方通行の高く右腕が上がる。

勝羅は最後の悪あがきかと思った。

このボロボロの一方通行に、ここで1発逆転の方法があるとは思わなかった。

これが油断だった。ここで忘れてはいけなかった。

曲がりなりにも、一方通行はこの世界の1人の主人公であるということ。

直後、一方通行の振り下ろした右腕がひび割れた地面をさらに叩き割り、周囲に無数の石の破片を銃弾のように飛ばした。

これには勝羅も焦った。

いくら『窒素防壁』があっても、至近距離から放たれる石の破片を防げない。

ある程度離れていれば、視認できるので持ち前の反射神経で絶対防御とも言える『演算型・衝撃拡散性複合素材』を即座に展開させるなりして防ぐことができる。

『窒素防壁』はその強度を完全に把握していないので、最後の防衛ラインとして残している。万が一の場合というときのためである。つまり、攻撃は『演算型・衝撃拡散性複合素材』でできるだけ防ぐというのが、勝羅の戦い方であった。

しかし、今回は違う。

勝羅と一方通行の間隔はわずか数十センチ。その『演算型・衝撃拡

散性複合素材』を展開する暇もない至近距離で銃弾より速い初速を持つ石の破片をい受ければ、どうなるかは明白だった。

「ぐあああああああッ!？」

勝羅の身体に無数の石の破片が突き刺さる。『窒素防壁』を突き抜けてくるからその分速度が落ちてるので、石の破片が身体を突き抜けることはない。そんな状況の中、咄嗟に上半身を倒しながら後ろに跳んだのは流石と言えよう。

それでも、勝羅の身体全体に大ダメージを与える。

大量の破片に吹き飛ばされた勝羅の身体が道路のフェンスに激突する。

「ん…ぐッ!」

この一方通行の攻撃を喰らってもなお、意識がある勝羅。やはり、身体能力の高さが功をそうしたのだろう。

自分の身体を見てみる。

身体の至るところに石の破片が刺さり、刺さった場所から血が滲み出ている。

急所に刺さっていないのは、奇跡と言えよる。

自分の現状を確認した勝羅は、次に一方通行の方へと目を遣る。

一方通行は動く気配はない。

気絶したのか、と勝羅は推測をたてると、また視線を自分の身体に戻す。

(とりあえず、治療するか)

『素材構築』には、能力の応用の1つとして治療もある。破れた血管や裂けた皮膚を構築することができる。血液の増幅も可能だ。

しかし、これには多大な集中力がある。

たった数ミリにも満たない皮膚を構築し、またその上からという感じで細かい作業をしなければならぬ。もし、構築する勝羅の皮膚が人より厚ければ、構築した後で傷口に違和感が残り後々に何かが起こるとも限らない。

血液の増幅もそうだ。増幅する血液の量が多過ぎれば、血管破裂なんという大惨事にも成り兼ねない。

(かなり数があるな……浅いやつは残して、深いやつだけ治療しとくか。石だけは全部抜いておこう)

勝羅の身体に刺さっている石の数が数十ヶ所とある。上半身はのけ反らせたおかげで刺さった箇所が少ないが、もろに直撃を受けた足には至る所から血が出ている。

深い傷を勝羅は1つ1つ治していく。

時間は30秒もかからないが、やはり多大な集中力を要する。

そして、5分後。

動ける程度には治し終わっていた。

「ふう〜」

勝羅が一息つく。

「さてと……一方通行を治すか」

勝羅は起き上がり、倒れている一方通行に近づく。
やはり、一方通行は俯せの状態で気絶していた。

（そう言えば、一方通行に攻撃ができたのって、蹴りが1発と拳が1発の計2発だけか）

たった2発で一方通行を倒してしまったのは、その2発がどれだけの威力を秘めていたのかが物語っている。

「外傷は……なしか。2発しか入れてないから当たり前か」

肋骨が折れていたが、これはすぐに治した。

普通は骨は皮膚や筋肉で見えないわけだが、『素材構築』のおかげで、素材とするものが目で見えていなくても何となく感じる事ができる。おそらく、素材とするものに干渉するため、と勝羅は推測している。

さらに言えば、皮膚や血管を治すより骨を治す方が簡単だったりする。

折れた骨は治したが、一方通行は目を開けない。

「このまま一方通行を置いていくわけにはいかないしな。仕方ない。病院に連れて行くか」

勝羅は気絶した一方通行の身体を背に乗せておんぶ状態になる。
もちろん、チョーカー型電極の能力使用モードは切っており。

あの一方通行が誰かにおんぶしてもらおうというかなりシユールな光景ができてしまったわけだが気にする必要はない。

「まずは『冥土帰し』のいる病院を探すか。一方通行を持っていくとしたらあそこしかないわけだしな」

こうして、勝羅は一方通行を背負いながらどこにあるかもわからない病院を目指して歩き始めた。

唯一不安要素があるとすれば、

(病院探してる間に起きるなよ。背中でききられて攻撃されたら、防御も回避もできないからな)

当たり前である。

自分がおんぶ状態にいることを理解した一方通行がどんな行動に出るかなど明白だ。

その後、勝羅が冷や汗を垂らしながら、一方通行の髪の毛を抜いたのは余談である。

第5話 力と技（後書き）

能力使用モードの一方通行の髪の毛って抜けませんよね。

髪の毛を掴んで（ここから無理な気がしますが、そこは考えないで下さい）引つ張ろうとすれば、木原神拳と同じで『反射』が発動して一方通行の頭皮に激痛が走ります。髪の毛は、引き抜こうとするベクトルが『反射』されますから抜けませんね。

誤字脱字の指摘と感想をよろしく願います。

次回は、病院です。

第6話 病院

とある病院・診察室

「君は命知らずかい？彼を背負って来るなんて驚いたよ？」

「ええ、おっしやる通りで……………」

今、勝羅は『冥土帰し』と診察室で会っていた。

ここまで来るのに、どれだけの人に聞き回ったことか。聞いた人の中には、病院の方に電話しようか？、と気遣ってくれた人もいたが、勝羅は断った。電話した病院が『冥土帰し』のいる病院とは限らないからだ。一方通行を『冥土帰し』に見せるのが、1番だと思ったからのこと。

結局、1時間近くの時間を要してしまった。

しかし、今考えれば、さつさと病院に行つて『冥土帰し』の名前を出せばよかったのではないだろうかと思う。『冥土帰し』という異名はその業界の中で知らない者はいないはずだ。名前を出せば、その病院に連れていってもらえたかもしれない。

自分の知恵のなさに落胆していると、勝羅の診察が始まった。

「それで？君はなぜ彼を背負って来たんだい？」

そう聞いている間にも『冥土帰し』の手は診察を止めない。

「戦ったんですよ。こっちから喧嘩を吹っかけたんですけど」

「じゃあ、君がここにいて、彼がベッドの上にいる、という事は君は勝ったってことかい？」

「そういうことになりますね」

「これは本当に驚いたよ？」

『冥土帰し』が眼を丸くして言った。

「あ、そうだ。一方通行の電極に異常がないか見てやって下さい。けっこう手荒に戦ってしまったので、故障がないか心配です」

「君はなぜそのことを知っているんだい？彼が私の患者ということも知っていたみたいだしね？」

「たまたまですよ。他に知っているとしたら『冥土帰し』が学園都市統括理事長の命の恩人とかですかね」

また眼を丸くする『冥土帰し』。

「そこまで知っているなんて驚きだよ？君は何者なんだい？」

「普通の学園都市の学生ですよ。まあ、人より多少はこの街のことを知っていますよが」

それからも世間話をする勝羅と『冥土帰し』。診察するわずかな時間の間だけだが。

「俺はこれで。あと、一方通行が目が覚めたら、この携帯番号に連

絡してくれ、と伝えて下さい」

勝羅は『冥土帰し』に自分の携帯の電話番号が書いてある紙切れを渡す。

「いいのかい？これを渡したら、彼は負けず嫌いだから、また勝負を仕掛けるかもしれないよ？」

「結構です。勝負を仕掛けてくるなら、返り討ちにします。それに、この紙切れを渡すのは、単純に一方通行と連絡手段を取りたいだけですから」

「そうかい？君がそう言うなら、構わないよ？」

『冥土帰し』はもらった紙切れを白衣のポケットに入れた。

とある病院・玄関ロビー

勝羅は病院の玄関ロビーを歩いていた。

昼時ということもあって来る患者は少ない。周りを見渡しても、2、3人しかいない。

学生くらいの年代は勝羅しかいなかった。

(とりあえず『冥土帰し』とも会えて、一方通行の髪は取れたからよし。これが成功するかは置いて)

「久しぶりにここに来たかもー！、ってミサカはミサカは高らかに宣言してみたり！」

勝羅は聞き覚えのある声に、思考を一旦中断して、玄関口に眼を向けた。そこには腰に手を当てる、ビシッと前方を指差している10代半ばの少女　　打ち止めがいた。

（ここに打ち止めがいるのは、一方通行の見舞いが目的か？まあ、接触して損はないだろ）

とりあえず、勝羅は打ち止めに今の行動を注意することにした。本当は名前でも呼んで色々と話したいところだが、それはさすがに怪しまれてしまうため、自然に接触することにした。

「こら、ここは病院なんだから、静かにしないとダメだぞ」

「はい、ってミサカはミサカは自分の行動を素直に反省してみる。というか、見ず知らずのあなたは誰？ってミサカはミサカは首を捻ってみたり」

「1週間に1回通院しなければならぬ身体の弱い人間さ。それで、君はここに何をしに？その元気な姿だと別に診察というわけではないみたいだけど。もしかして、誰かの見舞いかな？」

「そうなのっ！実はあの人が入院したのを聞き付けたので見舞いに来たの！ってミサカはミサカはあなたの洞察力に驚きながら、おおざっぱに理由を説明してみる！」

「そっか。それは大変だな。じゃあ、早くその人のところの行かないと。あ、俺の名前は那雲勝羅。君は？」

「打ち止めだよ、ってミサカはミサカは自分の名前を言ってみる」

「打ち止めね。また縁があつたら、また会おう」

ここで忘れてはいけない。

一方通行の見舞いに来た打ち止めが、どのような手段を用いて、マンションからこの病院に来たことを。つまり、打ち止めには同行者がいる。

「もう、先に行くじゃんよ。一方通行に会いたいのわかるけど

あれ？その人は誰じゃん？」

その声に、ピシリと勝羅の口が止まった。

「うん？」

言葉が止まった勝羅に打ち止めが首を傾げる。

勝羅は黄泉川の出現に冷や汗を垂らす。ギギギと視線を打ち止めから玄関から入ってくる黄泉川に向ける。

(黄泉川あぁーッ！何であんたがこんなにいるんだよ！まだ学校にいる時間だろ！)

内心で叫ぶ勝羅が知る由もないが、今日はテストの1日目で、自分の担当のクラスは終わった黄泉川は一方通行の入院を聞き付けて、マンションで騒いでる打ち止めを車で拾い病院に来たということだった。

とにかく、勝羅は黄泉川が来たことに猛烈に不安を膨らんでいる。

「この人はなぐもという人なんだよ、ってミサカはミサカは説明してみる」

「ふ〜ん、那雲ね。うちの子が世話になったみたいじゃん」

「いえ、少し話していただけですので、世話なんてしてません」

下手に回れば黄泉川に色々と尻尾を掴まされそうな気がする勝羅は、どうやってこの状況を脱する方法を模索する。

しかし、そんな勝羅の努力を無駄となる。

「　　那雲、学校はどこじゃんよ？」

「は？」

突然の黄泉川の質問に、間抜けな声を出してしまう勝羅。

すぐに、表情をポーカーフフェイスに戻すと勝羅は答えた。

「なぜ、そんなことを聞くんですか？」

「特に理由はないじゃんよ。ただの勘じゃん。それとも、答えられ

ないじゃんか？」

ニヤニヤと笑う黄泉川。

既に色々と追い詰められているような気がする勝羅は次の言葉を紡ぎ出す。

「いえ、そんなことはありませんよ。俺の母校は、長点上機学園ですよ」

嘘もいいところである。

「そうか。じゃあ、この病院に何しに来たじゃんよ？」

「ただの通院です。もういいでしょ、俺はこれで」

勝羅は黄泉川の追い抜こうとすると、打ち止めがいつのまにかいなくなっていた気付いた。

「黄泉川ー！なくもがあの人を連れて来てくれたみたいだよー！、つてミサカはミサカは力いっばいに叫んでみる！」

「打ち止めあーッ！余計なことを黄泉川に言ってんじゃなあああー！……………い？」

いつのまにかいなくなっていた打ち止めが受付の看護婦に聞いた情報を力いっばい叫んだのに対して、勝羅は呼応するように叫んでしまった。

すぐに、叫ぶのを止めたが後の祭り。

もう取り返しが付かない。

「ほほお、君は私のところの居候を運んだ上に、私の名前を知っているときたじやんよ。さらに、この私を騙そうとしたじやん。さっきからよそよそしい態度は私が警備員と知っていたからじやん？」

「ハハハ……………」

「ちょっと説明してもらおうじやん」

黄泉川の職務質問という名の詰問が勝羅を襲う。

第6話 病院（後書き）

打ち止めの口調で、本来は『！』『や』『？』『』の後は1文字空けるんですけど、そうすると変な感じがするので、『、』『』で埋めてしまいました。

ご了承下さい。

次回は、裏路地です。

第7話 路地裏の殺戮（前書き）

遅くなって申し訳ありません。

2ヶ月ぶりの投稿です。

他の小説にてんてこ舞いでこちらを執筆することができなかったのです。

よろしければ、そちらの小説も読んで頂けると嬉しいな、という作者の願望です。

第7話 路地裏の殺戮

第一九学区：路地裏

第一九学区は他の区より発展が遅れ、寂れてしまった学区だ。そんな建物やがたくさんあり、不良たちのたまり場となっている。不良の大部分は無能力者（レベル0）で武装無能力者集団スキルアウトと呼ばれる。

そんな溜まり場に、1人の少年がやって来た。少年と言っても、小学校高学年とほとんど変わらない背丈だ。

カツンカツン、とその足音が裏路地の壁が反響して遠くまで響く。

「お〜い、無能力者（レベル0）の皆さま〜ん。出てこいや〜い。ボクと遊ぼうよ〜」

そう叫びながら奥へと歩いていく。
端はたから見れば、小学生くらいの子供が武装無能力者集団スキルアウトに喧嘩を売っているようにしか見えない。

「ああ、誰だ？俺たちにケンカを売ってきた奴は？」

「何だよ、ただのガキじゃねえか」

建物の陰から金髪の男、と耳にピアスをしている男2人の不良が出てきた。

「本当に無能力者（レベル0）が出てきたよ。ねえねえ、ボクと遊ぼうよ」

「は？……ギャハハハハ！おい、聞いたかよ？このガキ、俺たちと遊んでえんだとよ。世の中にはこんな馬鹿なガキもいるもんだよな！」

「ホントだよな！」

2人の不良は周りの不良たちも笑っていた。しかも馬鹿笑い。少年はその光景に溜め息をついていた。

金髪男の方が少年を上から見下ろしながら言った。

「それで、俺たちと何で遊ぼうってんだい？」

「チャンバラだよ」

「おーそうか。じゃあ、チャンバラは得物がないとな。俺たちは可愛らしいおもちゃしかないんだ。それでもいいかな？」

そう言うと、金髪男が懐から取り出したのはサバイバルナイフ。

「おいおい、それはマズくないか？相手は子供だぞ」

「心配ねえさ。世の中の恐ろしさってものを教えるだけなんだからさ」

金髪男はサバイバルナイフの少年に向ける。

「それで、ガキの得物は何だ？」

「これだよ！」

少年が元気に取り出したのは、ナイフだった。柄がないただ銀色一色のナイフ。

それを見た2人の不良は、予想外の得物に出てきたことに一瞬驚いたが、すぐに笑い始めた。

少年はその姿にまた溜め息をつくとき、おもむろに片手間にナイフを弄び始めた。

まるで、生き物のようにナイフが少年指の間をすり抜ける。

「そろそろ、いいかな？」

そして、少年は無造作に手に持っていたナイフを金髪男に向かって投げた。ヒュと風を切る音とほぼ同時に、金髪男の肩にサクツと刺さった。刃の部分が8割方入っている。

もちろん、突然ナイフが刺さったことに金髪男はすぐに気付いた。

「この野郎！」

相棒がやられたせいなのか、ピアス男が少年を足蹴りを喰らわせようとす。その蹴りを見た少年は口元をニヤリとさせて、一歩だけ後ろに跳んだ。

結果的に、ピアス男の蹴りは空中を切るだけになってしまった。

しかし、ピアス男は自分の蹴りが空振りしたことより、目の前で起きたことに目を疑った。

「き、消えたっ!?!」

ピアス男の蹴りを避けるために一歩だけ後ろに跳んだ少年が空中に溶け込むように消えてしまったのだ。

呆然とするピアス男に直ぐさま声が飛ぶ。

「馬鹿野郎！ガキは能力者だ！そのくらい分かりやがれ！」

「だったら、どんな能力なんだよ!?!」

金髪男の言葉にピアス男が落ち着くが、少年の能力が分からない以上、無能力者（レベル0）の自分たちには打つ手のしようがない。姿が見えるならまだしも、今は姿すら見えない。

「畜生！どこに行った！」

2人は首を動かして周りを警戒する。咄嗟のことに対応できるように戦闘態勢でだ。

「うわーみじめだなー」

地上から空中に踊り出た少年は両手に5本ずつ銀のナイフを携えていた。ニカッと笑うと、そのナイフを一気に投げた。下でキョロキョロしている不良たちに向かって。

今月の第一七七支部の風紀委員は『とある事件』で悩まされていた。

「先月と今月を合わせて18件。犯人の手掛かりは、背丈が低い、能力者、ナイフを使う。たったこれだけですわ。これでは犯人の目星も付けられませんですの」

ジャッジメント
風紀委員の白井黒子と初春飾利の2人が事件の担当している。

その事件名は『無能力者狩り（ゼロ・ハント）』。

「特に無能力者（レベル0）を狙った事件。被害者のほとんどが武装無能力者集団。中には能力者もいたみたいですが、こちらは巻き込まれた、という形ですね。一般の方に被害が出てないのが幸いですね。でも、能力者が無能力者（レベル0）を襲うこの事件は、武装無能力者集団の活動が活発化する恐れがあります。早々に解決する必要がありますね」

初春が愛用のパソコンをカタカタとキーボードを押しながら話す。

「ところで、初春。今、あなたは何をやってるのですの？」

「現場にある監視カメラの記録を1つ1つ確認しようかと思ってたところなんですけど………どうやら、現場を直接撮っているカメラはないようです。周囲のカメラに繋いで探してみます」

初春は初春で頑張っているようだ。

「じゃあ、こちらでも現場写真でも見ながらも少し考えてみますですの」

ソファアームに座っている黒子は机に広がっている写真の山の1枚を取

つてみる。その写真には生々しい現場が写っていた。写真に映っていたのは被害者の傷。顔や背中や腰など、身体のあらゆる部分に切り傷がついていた。

（よくもまあ、これだけの怪我をさせましたですの。どれもこれも切り傷ばかり。傷は深いものもありましたが、浅いものがほとんど。死者が出てないだけ不幸中の幸いって言ったところですよ。……うっ、こんなもの長い時間見てたら今日の夕食が入っていかないですわ）

白井はしかめつつらな表情をして、持っていた写真をデスクに広げる写真の山に投げ捨てる。

「白井さん、白井さん。ちょっと来て下さい。気になる映像が」

「何ですか？」

黒子はソファーから立ち上がって、初春のパソコンを覗いてみる。初春はその映像の再生ボタンをクリックした。映像の内容は、1人の子供が裏路地に入って行くところだけだった。初春がそこで一時停止のボタンを押す。

「これがどうかしましたのですか？」

黒子には初春の言いたいことがわからなかった。

「白井さん、わからないんですか？この子が裏路地に入る時間はバツチリ犯行時刻に合ってますよ。しかも……」

ビデオがまた再生させられると画面には映らないが悲鳴と叫び声が

聞こえた。武装無能力者集団スキルアウトと思わしき声だ。
10分後、声が聞こえなくなるとまたさっきの子供が出てきた。その子供は画面の端から端へと消えていった。

「私はこの子が犯人ではないかと思ってるんです」

「確かに目撃証言と合致しますが、ちょっと証拠不足ですね」

「そうですね………。とりあえず、この映像の解析を進めてみます。顔が分かれば、書庫バンクで調べられるかもしれません」

「お願いしますわ」

また、それぞれの作業を始める。と言っても、黒子は事件の資料を見比べるだけである。

（被害者の数は43人。その中で能力者は3人。18件のうち10件は第一九学区ですわ。被害者の全員が切り傷を負わせられて意識不明。全くとんでもない事件ですね………）

そこで黒子は『あること』に気付いた。

18件の中で被害者の数は43人。そのうち能力者は3人。明らかに無能力者（レベル0）が多い。

いや、多過ぎではないか？

武装無能力者集団スキルアウトは、全員が全員無能力者（レベル0）で構成されているわけではない。『壁』にぶち当たり結果を伸ばせなくなってしまう諦めてしまった能力者である低能力者（レベル1）や異能力者（レベル2）だっている。中には強能力者（レベル3）という強つわもの

者もいるわけだが、こちらは絶対数が圧倒的に少ない。

無能力者（レベル0）が大半占める武装無能力者集団スキルアウトに18件もの攻撃を仕掛けといて被害を受けた能力者はたったの3人。さらに、この3人は犯人に無能力者（レベル0）がやられているところへ助けに来たという形で巻き込まれて被害を受けている。つまり、犯人は最初から無能力者（レベル0）しか狙っていないとなる。

では、犯人は武装無能力者集団の中から無能力者（レベル0）と能力者を見分けているのか？

たまたま、この18件で標的となった被害者が全員無能力者（レベル0）だったのだろうか。その可能性がないとは言いつれないが、確率は低い。そもそも、無能力者（レベル0）と能力者をどうやって見分ける方法が分からない。特殊な機械を使うのか、超能力を使うのか。それすら分からない。

黒子は自分の中で出した考えにうーんと頭を悩ましていた。

第7話 路地裏の殺戮（後書き）

補足説明

少年の銀のナイフは、《家庭教師ヒットマンリボーン》のヴァリアーのベルフェゴールが使う銀のナイフだと思ってくだ。

誤字脱字の指摘と感想をよろしくお願いします。

第8話 悪魔襲来(前書き)

連日投稿です。

第8話 悪魔襲来

ロンドン：イギリス清教の女子寮上空

『そいつ』は女子寮から遙か上空3000メートルのところにいる。月に照らされた身体は漆黒の色を強調し、背中から生えた翼は黒い羽根の1枚1枚が月光を反射し光っている。

「ククククツ。ようやく着いたぜ。この下からそれなりに強い力を感じる。この世界で言う聖人か。これ以外にもいくつか強い力を感じるが、時間がないからこいつがいつか」

凶悪な微笑を浮かべる『そいつ』は真下へと急降下を始めた。

ロンドン：イギリス清教の女子寮

世界で20人といない聖人の1人である神裂火織かんざき かおりは執務室で書類の整理をしていた。聖人である彼女は魔術師の排除や魔術結社の殲滅などの戦闘が本来の性分だが、毎日毎日そんな仕事があるわけがなく、今日は書類の整理という事務的な仕事を行っていた。

「ふうー」

今日のノルマを終わらせた神裂は息を吐きながら、椅子の背もたれに背中を預ける。聖人という性質のせいなのか、いくらか他人より

仕事が多いのは仕方ない。あとは、イギリス清教の傘下である天草式十字凄教の女教皇プリエステスを務めているのも要因なのかもしれない。

「女教皇プリエステス、仕事が終わりましたのなら、今日はもう寮の方でお休みになられてはどうですか？」

一緒に仕事をしている天草式の1人が神裂に言った。

神裂がいる部屋にはほとんどの天草式がいた。この場プリエステスにいない天草式は他の仕事に駆り出されている。基本的に天草式は女教皇の下で仕事をしているのだ。

「いえ、もう少しやっていきますよ。やらなければならない仕事はたくさんあるのですから」

ノルマが終わったところで、控えている仕事はたくさんある。

「いえ、あとの仕事は私たちにお任せ下さい。女教皇プリエステスは連日で討伐の任務に当たっていましたから、今日くらいはゆっくりお休みを」

「そうですか？」

「そうです」

「分かりました。今日はこの辺で」

実際のところ、神裂にはあまり疲労感が溜まっていなかったが、たまにはいいかな、と思いその言葉に甘えることにした。

そこにいた天草式の全員は神裂がパタンとドアを閉めて、廊下を歩いて行くのを確認すると、教皇代理の建宮齋示たてみや さいじの所にダダダッと集まった。

「最近の女教皇、働きすぎじゃありませんか？」

「仕事に生きる女って感じなのよな。非常にマズい」

「だけど、理由は簡単。『想い人』に会えないからよ」

「だな。なんとかして、女教皇を仕事から救ってやらないと」

「でも、どうやってやるんですか？ 実際、女教皇は1日に私たちの3倍以上仕事をこなしているんですよ」

「そこをなんとかしないと。何かいい方法はないものか……………」

天草式の夜はまだ長い。いろんな意味で。

女子寮に帰ってきた神裂はオルソラをつくった美味しい夕食を堪能した後、自室に入った。腰に下げていた愛刀の七天七刀を壁に立て掛ける。

現在の時刻は午後9時。

寝る時間には少し早い、特にするともないので、神裂は明日に備えて寝ることにした。ベッドに入った瞬間、ビクツと自分の身体が震える。

「シスター・アンジエレネ、何をやっているんですか？」

ベッドの中にいたのはアンジェレネだった。神裂は布団をおもいきりめくると神裂の足元で縮こまっているアンジェレネがいる。

「スースー、むにゃむにゃ……………」

お気に入りのクマのぬいぐるみを抱いて幸せな表情で寝ている。

「シスター・アンジェレネ！起きなさい！」

神裂はアンジェレネを起こそうとするが、むにゃむにゃと言っただけで起きる気配が全くない。

「うつろ〜ちゃ〜い〜」

今、神裂はアンジェレネの肩を揺らして起こそうとしているので、アンジェレネの短い足でも届く距離にいる。

ドガツ！！

アンジェレネのお子様特有の足蹴りが神裂の腹にヒットする。世界に20人といない聖人の神裂が1メートルくらい吹き飛んだ。

神裂は軽く咳込みながらも呼吸を整えて立った。

「シスター・アンジェレネエエー！！！」

このとき、神裂の部屋が一瞬真っ暗になり、神裂の眼がキラキラ光り、髪が逆立ったことは誰も知らない。

アンジェレネはビクツと大きく身体を震わせ、むくつと起き上がった。

た。

「……神裂ちゃん、どうしたの？何で私の部屋にいるの？」

「それはこっちのセリフです。何故あなたがここにいるのですか」

アンジェレネはキョロキョロ部屋の中を見渡す。

「えへへ、また間違えちゃった。夜中にトイレに行くと部屋を間違えちゃうんだよね。この前はシェリーのところに行っちゃったんだよね。神裂ちゃん、何か怒ってません？」

自分の置かれた状況を理解したのか、恥ずかしそうに頭をポリポリとかきながら言った。

「早く出て行きなさいあああい！！！」

「やれやれ。やっと行きましたか」

アンジェレネを元の部屋に返して、神裂がベッドに入ろうとしたとき、

ドガアアアアアアアアン！！！！

激しい爆音と共に神裂の部屋の天井が壊れた。いや、正確には何かが突き破って来た。神裂は壁立て掛けてある七天七刀を取ると、いつでも抜刀できる構えを取る。

「何者ですか」

神裂は砂煙で良く見えないが、この中に誰かがいることは確信していた。

天井の穴から風が入り込んだのか砂煙が揺らぐ。そのとき神裂の目が黒い影を捕えた。

ヒュン、と七天七刀が風を切り、横からの刃が黒い影を襲う。

だが、ガギンツ！とその刃は止められる。

「ッ！？」

神裂の振るう刃が止められた。聖人の力で刀を振っているにも関わらず。神裂は刀を戻そうとするが、ピクリとも動かない。

（止められたんじゃない、何かに掴まれている！）

砂煙が少しずつ晴れ、黒い影の正体が分かる。

「悪魔……………ッ！？」

神裂の目に飛び込んで来たのは、その黒い影は悪魔と言える姿をした者だった。

「ヒヒヒヒツ。アンタは聖人だな。あなたの身体をもらいに来たぜ」

『そいつ』は七天七刀を片手で掴みながら話す。さつきから引つ張ったり、押したりするがピクリとも動かない。聖人の腕力は普通の人間の数十倍にもなる。それを片手1本で押さえたのだ。

それでも諦めない神裂は刀を奪還するために、聖人の身体能力をフルに活用した高速の蹴りを放つ。鉄筋コンクリートのビルだろうが、簡単に壊すほどの威力を持つ蹴りだ。人間に向かって、尚且つ部屋の中で放つ蹴りではないが、神裂の本能がそこまでしないと敵わないと判断した。

しかし、その渾身の蹴りも『そいつ』のもう片方の手によって止められる。いや、掴まれる。後退しようにも足を掴まれているため身動きができない。

「そんなに暴れるなよ。すぐに、楽になるって」

神裂の足を掴む手の握力が増す。それは、神裂の足を潰すほどに。

「ぐあうツ!!」

「おっと、これは力を入れ過ぎたか。これから使う身体だから大切に扱わないとな」

故意にやっているようにしか聞こえない。

「な、何ですか！あなたは！」

「俺か？俺は悪魔ザガー・グゾーバル。」

「悪魔！？まさか、誰かが悪魔堕し（デビルフォール）でもしたんですか！？」

「悪魔堕し（デビルフォール）？この世界にはそんな面白い魔術があるのかよ」

「質問しているのはこちらです！答えて下さい！」

「ああ、うるせえな。人間風情が俺に盾突くんじゃねえよ」

「くっ！」

「もう話は終わりだ。こっちは時間がないからな」

ザーガが眼を見開くと、神裂の眼が血のような真紅に染まっていった。

「がああああああああああああああああああ……………！！！」

第8話 悪魔襲来（後書き）

神裂がキシヤすくなってるのは気にしないで下さい。書いてたら、
そっとなっちゃったんです（^^）；

誤字脱字の指摘と感想をよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7150s/>

Exorcist ~ 悪魔と戦う者 ~

2011年10月9日01時02分発行